

福祉系大学経営者協議会
ソーシャルワーカーの“声”
プロジェクト
パイロット事業報告書



関西福祉科学大学

平成 24 年 6 月

も く じ

I	事業の概要	・・・・・・・・	6
II	「ソーシャルワーカーの”声”プロジェクト」パイロット事業	・・・・・・・・	9
III	報告集		
1-①	オリンテーションA	・・・・・・・・	14
1-②	オリンテーションB	・・・・・・・・	16
2	被害者支援の基本	・・・・・・・・	17
3-①	インタビュー方法A	・・・・・・・・	18
3-②	インタビュー方法B	・・・・・・・・	19
4	テルネットと世界災害語り継ぎ	・・・・・・・・	20
5	津波の記憶・記録のミュージアム	・・・・・・・・	21
6	メディアによる災害記録の保存と語り継ぎ	・・・・・・・・	22
7	人と防災未来センター	・・・・・・・・	24
8	伊賀浩樹氏・池田真知子氏	・・・・・・・・	26
9	加藤和彦氏	・・・・・・・・	29
10-①	ソーシャルワーカーの業務A	・・・・・・・・	33
10-②	ソーシャルワーカーの業務B	・・・・・・・・	34
11	交流会	・・・・・・・・	35
12	ソーシャルワーカーの“声”プロジェクトについて	・・・・・・・・	36
13	東北福祉大学の取り組み	・・・・・・・・	37
14	日本社会福祉士会の取り組み	・・・・・・・・	39
15	東日本大震災におけるソーシャルワーカーの活動	・・・・・・・・	41
16	宮城県社会福祉士会訪問	・・・・・・・・	43
17	東松島市大曲地区	・・・・・・・・	44
18	南三陸町	・・・・・・・・	46
19	石巻市雄勝地域包括支援センター	・・・・・・・・	48
20	渡波地域包括支援センター	・・・・・・・・	50
21	M病院・医療福祉相談室	・・・・・・・・	53
22	I市社会福祉協議会	・・・・・・・・	56
23	気仙沼市地域包括支援センター	・・・・・・・・	59
24	亘理町地域包括支援センター	・・・・・・・・	62
25	名取西地域包括支援センター	・・・・・・・・	65
26-①	グループ討議A	・・・・・・・・	68
26-②	グループ討議B	・・・・・・・・	71
27	教員総括A	・・・・・・・・	75
28	教員総括B	・・・・・・・・	77

“圧倒的無力感”から生まれる「力」

福祉系大学経営者協議会の設立趣旨は、豊かな社会・日本を

福祉系大学経営者協議会は、社会福祉専門職の社会的地位・認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材養成教育の推進を目的としています。ソーシャルワーカーは、“あらゆる人”に寄り添い、人と社会をつなげ、自分らしい暮らしづくりを支援する非常に重要な仕事です。本協議会は、その仕事の大切さ、やりがい、魅力を発信し、時代を担う若者の育成に取り組んでいます。

東日本大震災、想像を絶する惨状 自分でも何かできないか…

2011年3月11日の東日本大震災の惨状を見て、本学園高校生たちは「被災地の高校生と何か共同で作りたい」と願い、宮城県女川高校の生徒たちと祈念の作品を合同で製作しました。遠く離れていても文化祭を共に楽しみ、感動・勇気・豊かな心を確かに共有し、「やればできる!」ということを実感することができました。

生活の再建(前に戻りたい)、支えあいながら工夫を凝らして

私は女川高校を訪問し謝意を伝えました。彼らは「当たり前のことが不自由で、ともすれば何をするにもおっくうになります。こんなときこそ、すべての学校行事を欠かさず行って楽しんでいます。」と笑顔で言ってくれました。私は胸が熱くなり、逆に励まされました。被災地の方々は支えあいながら、工夫をして、生活再建への気力を生み出しています。

災害時のソーシャルワーカー、できることがたくさん、“まるごと支援”

2011年3月、文京学院大学と関西福祉科学大学の学生たちは自らの意志で東日本大震災の被災地に向かい、現地のソーシャルワーカーにインタビューをしました。そこで、生活再建の“まるごと支援”に従事しているソーシャルワーカーから様々な“声”を聴き、そこから学ぶ「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」が始まりました。

心に響くように伝えたい、広げたい

学生たちは「圧倒的無力感(自分になんか、何ができるのか)」を痛切に感じ、言葉を失いました。しかし一方で、自分でも何かできることがあるはず!「もっと学び、自分を高めたい」という“意志”が湧き起ってきました。学生たちが日々成長していく姿に、教員も大きな喜びを感じ、学生たちを誇りに思いました。“あんなソーシャルワーカーになりたい「なってみせる」”の気概を彼らは得ました。ぜひ一人でも多くの学生にこのプロジェクトに参加してほしいと願っています。本書から学生の成長・志、そして災害支援にあたるソーシャルワーカーの“声”を感じ取っていただければ幸いです。



2012. 6 月
関西福祉科学大学

I 事業の概要

1. 福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」について

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的として、平成21年6月に設立され、全国の福祉教育を実施する19大学が加盟している。（パンフレット参照）

福祉系大学経営者協議会においても、東日本大震災に対する取り組みを行うべく、東北福祉大学・淑徳大学・中部学院大学・龍谷大学・関西福祉科学大学（委員長校）で構成される「復興支援委員会」を立ち上げ、「復興支援に関して何ができるか」を協議することとした。

2. コンセプト（基本的な考え方）

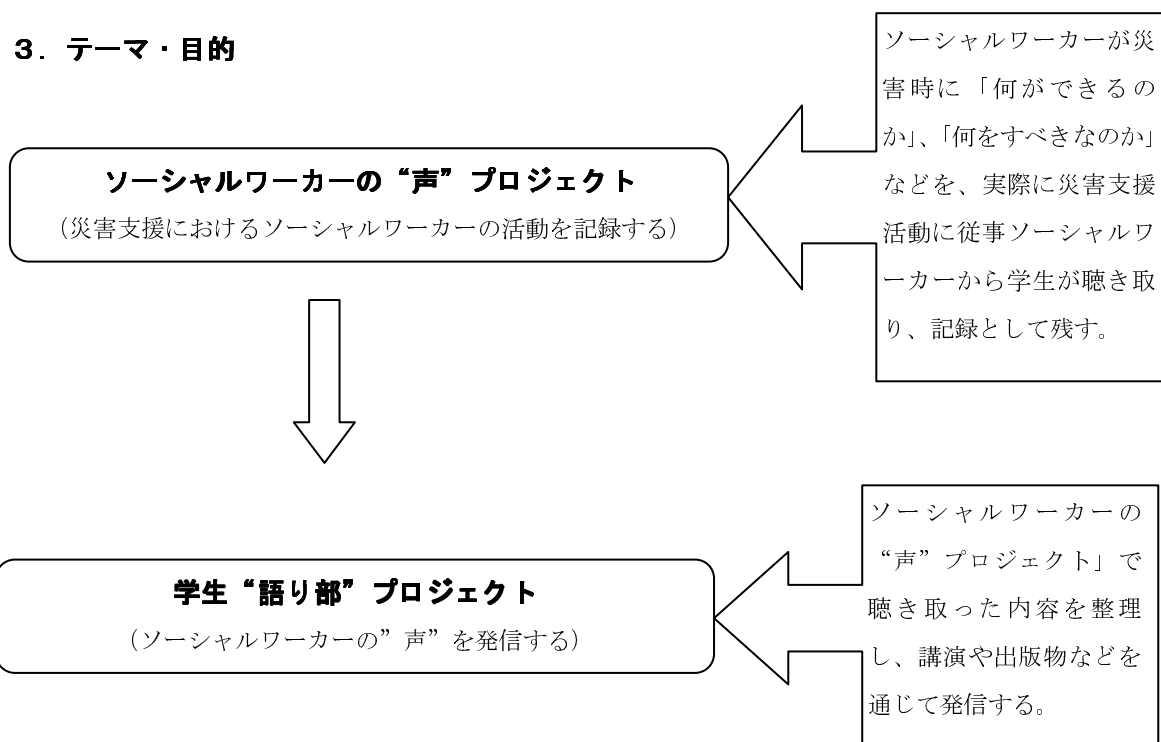
- ①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション
- ②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」
- ③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力

等、福祉系大学経営者協議会の設立理念、団体の特徴を生かしたプロジェクトとする。



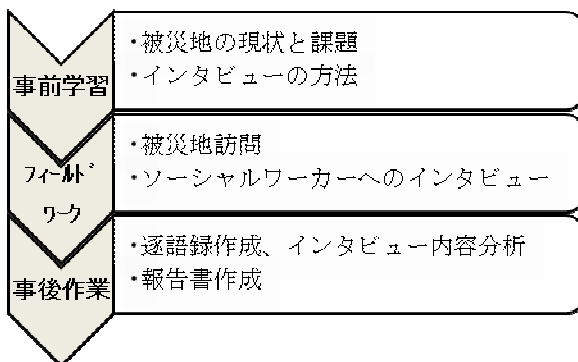
災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト

3. テーマ・目的



4. プログラム

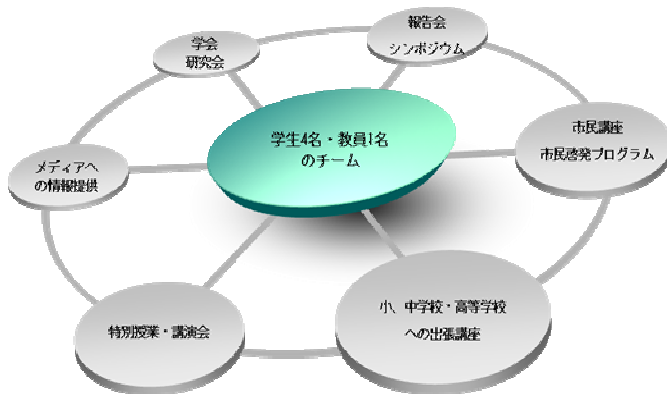
(1) ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト



・学内で一定のトレーニングを受けた学生4名と教員1名がチームを編成し、1週間程度被災地に入り、被災地の現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

・フィールドワークの成果をまとめ、その内容をチームで分析し、インタビュー内容とともに報告書にまとめる。

(2) 「学生“語り部”プロジェクト」



「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」に参加したチームが、学内外において広報活動を行う。

また、直接支援の実施を検討している機関、団体等には、要援護者および支援者であるソーシャルワーカーのニーズに関する情報を提供することで、支援とニーズのミスマッチを緩和する。

5. スケジュール(予定)

プロジェクト名		2012年												2013年			
		2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
声PJ(第1回) ※パイロット事業	事前学習	↔															
	フィールドワーク		↔														
	事後作業			↔													
語り部PJ(第1回)				↔													
声PJ(第2回)	事前学習				↔												
	フィールドワーク						↔										
	事後作業								↔								
語り部PJ(第2回)									↔								
声PJ(第3回)	事前学習												↔				
	フィールドワーク														↔		
	事後作業															4月以降	
語り部PJ(第3回)																6月以降	

※第2回以降については、パイロット事業の成果を踏まえ判断する。

6. 本プロジェクトを起点とした展開

本プロジェクトはソーシャルワーカーの声を記録し、発信することを目的としているが、参加した学生や教員が中心となり、以下のような展開が考えられる。

①要保護者への直接支援

ソーシャルワーカーの視点から被災者の生活（生活再建）課題を明らかにし、「学生”語り部”プロジェクト」により広く地域社会に伝えることで、学生、教員など大学関係者をはじめ、外部の機関、団体による直接支援に結びつける。

②ソーシャルワーカーへの後方支援

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」での聴き取り内容を分析し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を模索する。

③次代のソーシャルワーカーの育成

ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講座やワークショップを通じて、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成する。

Ⅱ 「ソーシャルワーカーの”声” プロジェクト」 パイロット事業

1. 目 的

大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを主な目的とする。

2. 概 要

学生4名（程度）と教員1名がチームを編成し、1週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。

3. 期 間

事前学習 : 平成24年2月上旬～3月上旬
フィールドワーク : 平成24年3月12日（月）～3月17日（土）
事後作業 : 平成24年4月～6月

4. 参加校（参加チーム）

文京学院大学（1チーム）
関西福祉科学大学（2チーム）

5. プログラム

(1) 事前学習（関西福祉科学大学の例）

	日 時 (場所)	内 容	教材・資料
1 日 目	2月9日(木) 3限・4限 (大学2号 館404教室)	【学長挨拶】(30分) 【オリエンテーション】(60分) ・モデル事業の目的や全体スケジュール(事前学習、フィールドワーク、事後作業) ・現地調査のチーム編成、保護者説明、保険などについて。 ・自己紹介(16名)、個人票の記入。	パワーポイント 実施要領 オリエンテーションシミュレーション 個人票 保護者向け文書 シンポジウム案内
		【東北大震災と被害状況について】(90分：①50分②30分③10分) 事業対象である宮城県を中心に、震災被害の実態について理解を深める。 ①DVDを観て、グループで内容についてディスカッションし、全体に発表する ②教員が準備した資料を参考に、調査対象地域の被災状況についてより具体的に理解する。訪問先のまちを中心に、被災地の地理的な位置づけ、地名などについても確認する。 ③現在の状況を知る。	①DVD「東日本大震災の記録～3.11 宮城～」TBC東北放送 ②東日本大震災の被災地に関する文献資料(新聞記事、雑誌論文、インターネット上の資料などを含む)、白地図
2 日 目	2月16日 (木) 3限・4限 (大学2号 館404教室)	【被災者支援の基本】 被災者支援において必要な知識、配慮すべきことを整理する。 PTSD(心的外傷後ストレス障害)など、被災地で活動する際に、最低限必要な事項を理解する。 さらに、災害支援を行う支援者のメンタルヘルスについても考察する。	被災者支援に関する文献
3 日 目	2月21日 (火) 3限・4限 (大学2号 館404教室)	【インタビューの方法①】 ねらい： ソーシャルワーカーへのインタビューの仕方、記録の取り方、逐語録の作成方法などを理解する。 方法： 教員が資料をもとに説明し、必要に応じて演習を行う。	調査方法、記録の取り方などに関する文献
4 日 目	2月28日 (火) 時間：未定 (13:00～ 19:30)	【インタビューの方法②】 被災地について理解を深める。 実際にインタビューを行い、学びを深める。 ①阪神淡路大震災記念人と防災未来センターにおける Tell-Net フォーラム “災害の記憶・記録の保存と語り継ぎ”、展示資料、関体験学習を通じた学習を行う。 → 全員 ※阪神淡路大震災記念人と防災未来センター ②阪神・淡路大震災で活動経験のあるソーシャルワーカー(神戸市の地域包	

		括支援センター、福祉事務所)を対象にインタビューを行う(ワーカー1名に対して教員1名+学生4名)。→派遣チームのみ ※A チーム:神戸老人ホーム養護老人ホーム住吉苑 ※B チーム:神戸市総合福祉センター	
5 日 目	3月5日(月) 13時00分～ 16時10分 (大学2号館404教室)	【ソーシャルワーカーの業務について】 調査対象となるソーシャルワーカーの業務(職種ごとの被災者支援)を理解する。 震災時に求められるソーシャルワーカーの能力や役割を考える(心のケアに偏重した心理モデルではなく、生活支援を目指す生活モデルに焦点を当てる)。 ①DVDを観て、調査対象となるソーシャルワーカーの業務を理解する。②過去の震災における文献を読み、ワーカーは何を行い、何ができなかったのか、何を求められたのかなどについてグループごとに意見を出し合い・まとめ、発表する。 <ポイント> ・震災直後の各種団体の動きを知る ・被災者支援の必要性(災害福祉)を理解する。 ・日本社会福祉士会など各種団体が災害支援におけるワーカーの役割をどのように位置づけているかを理解する(cf. 2012年1月21日 日本社会福祉学会が講演「震災ソーシャルワークの必要性」を実施)。 ・宮城県社会福祉士会の現状と取り組みについて理解する。 【出発に向けて】 持ち物、服装、宿泊、パイロット事業実施中の注意事項なども含めて、出発までの最終確認を行う。	①DVD「社会福祉士の仕事」日本社会福祉士会 ②過去の震災での被災地におけるソーシャルワーカーによる福祉活動に関する文献(新聞記事、雑誌論文、インターネット上の資料などを含む)

(2) フィールドワーク

①拠点(宿泊場所)

東北自治体総合研修センター

〒981-3341 宮城県黒川郡富谷町成田二丁目22-1

電話: 022-351-5771 FAX: 022-351-5773

HP: <http://www.thk-jc.or.jp/>

②スケジュール

日 程		内 容	実施単位
3 月 11 日 (日)	18 : 30	梅田スカイビル タワーイースト 1 階 集合	各チーム
	19 : 30	梅田スカイビル タワーイースト 1 階 出発 (車中泊)	
3 月 12 日 (月)	08 : 10	仙台駅東口代々木ゼミナール前	各チーム
	夕方	東北自治体総合研修センター集合	
	夜間	交流会	合同
3 月 13 日 (火)	午前	<オリエンテーション> ①ソーシャルワーカーの“声”プロジェクトについて 関西福祉科学大学 遠藤洋二 ②東北福祉大学の取り組み 東北福祉大学学生生活支援センター ボランティア支援室コーディネーター 鶴橋 徹 ③日本社会福祉士会の取り組み 文京学院大学・日本社会福祉士会 山村睦	合同
	午後①	<講演> 「被災地の現状と課題ーソーシャルワークの視点からー」 宮城県社会福祉士会副会長 宮城県サポートセンター支援事務所長 社会福祉士 鈴木 守幸	合同
	午後②	講演を受け、グループ討議	合同
	夜間	チームミーティング・スーパービジョン 宮城県社会福祉士会訪問	各チーム
3 月 14 日 (水)	午前～午後	被害状況視察 (東松島市・南三陸町)	合同
	夜間	チームミーティング・スーパービジョン	各チーム
3 月 15 日 (木)	終日	・インタビュー実施地 (宮城県内) への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー①	各チーム
	夜間	合同ミーティング	合同
3 月 16 日 (金)	終日	・インタビュー実施地 (宮城県内) への移動 ・インタビュー実施地域視察・データ収集 ・ソーシャルワーカーへのインタビュー①	各チーム
	夜間	チームミーティング・スーパービジョン	各チーム
3 月 17 日 (土)	午前	合同ミーティング	合同
	19 : 00	仙台駅東口代々木ゼミナール集合	各チーム
	19 : 30	仙台駅東口代々木ゼミナール出発	

3 月 18 日 (日)	08 : 10	梅田スカイビル タワーイースト 1 階 到着	各チーム
--------------	---------	------------------------	------

Ⅲ 報告集

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
1-①	2012/2/9	座学	オリンテーションA	西岡 なつみ

まず、遠藤先生から東日本大震災復興プロジェクトについてのオリエンテーションが行われた。今回のプロジェクトの目的、プロジェクトの概要、プロジェクト参加にあたっての留意点、チーム編成、その他が説明された。その後、派遣チームA（4名）、派遣チームB（4名）、バックアップチーム（8名）に分かれてチーム内で顔合わせ・自己紹介を行った。続いて、東日本大震災の被災状況についてDVDを見ながら学習した。

そして4グループに分かれて、今回の“ソーシャルワーカーの声プロジェクト”のインタビューで一体何をSWに聞きたいかについてグループ内で意見を出し合い、その意見をグループ間で共有した。



グループⅠでは、①SWとして震災後何をしたのか②専門職だけで補えない部分は何か③今となって後悔したことはあるか④SWのフォロー（バックアップ）の状況④震災前と後の連携する機関⑤今後の非常事態に向けて事前に取り組むべきもの⑥SWとして最優先したこと⑦住民への対処の仕方⑧専門職だからできることという意見があがった。

グループⅡでは、現地でどんな援助支援がされているか②自分も被災者なのに

SWがどんな気持ちで支援にあたっているか③現在の状況や被災者の気持ちが変わっていく中でどんな壁にぶち当たって、それをどう対処していたのかという意見があがった。

グループⅢでは、①震災が起きてから今までSWは何を見て、どんな動き方をしたのか②児童養護施設を失った児童、親を亡くした児童に対しての支援③震災が起きた時（過去）と今（現在）必要なこと④震災で障害を持った人はどうしているのかという意見があがった。

グループⅣでは、①次に震災が起きた時、私たちSWができること②現地の人たちのニーズの収集方法③被災された障害者の状況④自分からニーズを発信できない人への対応⑤過去の経験は生かされていて、予防は有効だったのか⑥被災者の心理的ケアはどうしているのかという意見があがった。

各グループでさまざまな意見が飛び交ったが、最終的にどのグループも「自分たち（学生）の立場を活かした素直な意見を発信していきたい」という共通の思いを持っているということが明らかになった。

オリエンテーションでは、今回のプロジェクトは学生が被災地のソーシャルワーカーにインタビューしに訪れるということが前代未聞のことであり、今後の被災地支援におけるソーシャルワーカーの役割や機能を明らかにするためにとっても重要なものなのだということが告げら

れた。自分たちが進めていくプロジェクトは非常に責任のあるものなのだと身が引き締まると同時に、今まで誰も行ったことがないことを自分たちの手で進めていくことができ、そこで学んだことを被災地支援に役立てることができるのだと思うと期待で胸が躍った。

グループワークでは、メンバー全員が自発的かつ積極的に“ソーシャルワーカーに聞きたいこと”についての意見を出し合っていて、メンバーひとりひとりが非常に目的意識を持ってこのプロジェクトに臨んでいる様子がうかがえた。今回のプロジェクトは学生が主体であり教員は補佐をするのみということで、私たち学生ひとりひとりが主体的に考え、行動する姿勢が重要となる。私たちが主体のプロジェクトというこの貴重な機会に、しっかりと自分の心で感じ、自分の頭で考え、自分の手で活動をしていきたい。そして、今、この場所で私たちには何ができるのかを模索する中で私たち学生の感性を大切にしながら、私たちにしかできない方法で今後の被災地復興支援へと結びつけていきたい。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
1-②	2012/2/9	座学	オリエンテーションB	畑 中 美 里

まず、東日本大震災復興支援プロジェクトの一つである「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」の概要が説明された。プロジェクトは、大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したソーシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを目的としている。

概要は、学生4名と教員1名がチームを編成し、1週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活躍するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。参加校は、文京大学（1チーム）と関西福祉科学大学（2チーム）である。

次に、二つ目のプロジェクトである「学生“語り部”プロジェクト」の説明があった。このプロジェクトの目的は、「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」で得た情報を、教員指導のもと、参加学生が分析し、「災害支援におけるソーシャルワーカーの機能、役割」、「ソーシャルワーカーへの情報支援策」、「要援護者の現状とニーズ」などについて、広く社会に発信することにある。ただし、オリエンテーションの段階では、一つの“案”として先生方が考えていたものである（現状は、2012年5月3日～5日に開催される“中之島まつり”に語り部のプロジェクトとしてブース出展へ準備段階である）。

プロジェクト参加にあたって、いくつかの諸注意の説明を受けた後、派遣チーム・バックアップチーム混合で4チームに分かれ、東日本大震災のDVDで地震の程度、被災状況、等を学習した。そして、「現地のソーシャルワーカーに何を聞きたいか」という議題でグループディスカッションを行った。震災が起こってまず初めにどのような支援をしたのか、被災者のニーズ調査の具体的な方法、障がい者への支援方法、ソーシャルワーカー自信の心情の変化…等様々な意見が各チームから発表された。「学生」の立場を活かしたものにしていきたい、という思いが、全チームで共有できたグループディスカッションになった。

その後派遣チーム（A/B）、バックアップチームに分かれ、チーム内での責任者、副責任者、書記・広報（2名）の役割を決めた。

最後に、遠藤先生からこれから事前学習やフィールドワークで学んでいく中で、こころが傷ついたり、落ち込んだりすることがあればすぐに教員に相談に来るようにとの指導があった。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
2	2012/2/16	座学	被害者支援の基本	原 佐知子

13 : 00～14 : 30

松宮先生から東北六県について説明があった。震災のニュースなどで取り上げられる地名の位置を理解するために、グループに別れて地図を見ながら地名の穴埋めを行い、クイズ形式で東北六県について学んだ。

14 : 40～16 : 10

松宮先生が体験された阪神・淡路大震災の体験談を聞いた。体験談を聞き、感じたことや学んだことを事前学習終了後に松宮先生にメールでレポートを提出した。

この日の事前学習では、東北六県の地名や場所を知ることができた。東北六県の白地図の地名が穴埋めになっており、前に置かれている資料と見比べながら地名を埋めていった。解答を書き込む白地図は前に持って行ってはいけないというルールだったので、グループで協力しながらゲーム感覚で学ぶことができたと感じる。また、座席でグループにわかれたので、同じグループのメンバーと協力しながら学ぶことができた。

松宮先生から体験談を聞き、被災者から見ることと他の地域から見ることでは同じものを見ている、同じように感じる訳ではないということが印象に残っている。被災者をみて、目に見える被害の大きさに「かわいそう」や「気の毒」といった感情を持つが、決して被害が少ないから「幸せ」ではないと気づくことが出来た。目には見えないが「悲しみ」という感情は被害の大小に関わらず持っているものだと感じた。

松宮先生の体験談を聞きながら、レポートを提出するためのメモを取った。話を聞きながらメモを取るというのは、インタビューを記録する際に欠かせないことだと気づいた。最初は体験談を聞きながら言葉のすべてをメモしようとしたが、とても追いつけなかった。そのため途中からはメモの取り方を要点や自分の気になったキーワードや話の流れをおおまかに書くようにし、メモを取ることに集中するのではなく、話を集中して聞くようにした。その後、レポートを作成しようとメモを見直していると、メモを取ったキーワードから話の内容をすぐに思い出すことができた。

体験談を聞きその当時の活動を知るだけでなく、メモをどのようにして取るべきなのかということも学ぶことが出来たと感じる。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
3-①	2012/2/21	座学	インタビュー方法A	泉 綾 子

野村先生より、インタビュー法について講義をしていただいた。今回の調査活動では半構造化インタビュー法を用いるため、配布レジュメに沿って説明を受けた。

続いて逐語録の作成に関する説明を受けた。まず、インタビューを始める前、終了時、終了後にすることについて、配布ワークシートを用いてグループ内（チーム関係なく混合させて）で意見を出し合った。そして実際に、3～4人でインタビューのロールプレイを行った。この時に、インタビューをする側、受ける側、記録側の役割を決めて行った。

インタビュー前後の注意点に関して意見を出し合ったとき、インタビューをする環境を工夫することや、記録に関する確認、インタビューを受けて下さる方への配慮など観点が複数出てきた。自分たちで何が必要か考え、後に教員から絶対条件を伝えてもらうことで自由に発想し、インタビューを実際に行う際の工夫などを考えることができたように感じる。今回は考えを出すことや必要事項を確認することが中心ではあるが、実際にインタビューの前にアイスブレイクのような雰囲気作りができるか、という点では不安を感じている様子も見られた。また、実際にロールプレイをしてみたところ、インタビュー側が臨機応変に質問をする力や相槌、話の展開を促す力が求められると感じた。そして記録側でも、会話をすべてとろうとするとメモが追いつかず、何をどのようにメモしてよいか分からない状況があったようだ。

所感

振り返りのとき、教員からキーワードをおさえることや、です・ますなどは省略すること、自分たちで解読できる簡略した表記などを作ることなどの提案を頂いた。インタビューを受ける側は役割が災害支援をしてきたソーシャルワーカーということで、イメージをしながら答えてくれていた。インタビューや記録に関しては場数を踏むことやメンバーのフォローで、学生なりにもインタビューを受けて下さる方の思いや声を引き出せるようにしていきたいと感じた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
3-②	2012/2/21	座学	インタビュー方法B	畑 中 美 里

ソーシャルワーカーへのインタビューの仕方、記録の取り方、逐語録の作成方法などを理解することを目的として事前学習を行った。

担当の先生から配布資料について説明（インタビュー前、インタビュー終了時、インタビュー終了後にすることなど）があり、その後、実際に4人1組になり、インタビューの演習をするという内容であった。（インタビューイー1人、インタビュアー1人、記録2人）

インタビューの演習では、チームごとに役割をローテーションで行い、実際のインタビューを想定し、始めの挨拶から、終わりのあいさつまでを行った。ソーシャルワーカー役は、自分が被災地で支援活動をしたと仮定した。

グループで行ったインタビューの演習により、インタビューのイメージが想像しやすくなった。インタビューを行う中で、記録に関しては全く手が追いつかなかった。先生にアドバイスを求めると、重要だと思うキーワードを中心にメモを取っていくと良いと教えてくださった。インタビューイーに関しては、インタビューイーの回答がどういうものなのか予想が出来ない分、頭の回転を速くし、その回答からどこをピックアップして聞くのかを考えながらインタビューすることの難しさを感じた。またそればかりを考え過ぎて、聞く姿勢を崩してはいけないとも感じた。

そして、ICレコーダーに頼り過ぎるのもいけないとも教わった。ICレコーダーは、色んな雑音をも拾いってしまうので、プリントをめくる音や、ドアを閉める音が、キーワードとなる部分に被ってしまうことも少なくないそうだ。

この事前学習を通して、インタビューという今までしたことのない体験の説明を受けたり演習をすることで、イメージが湧きやすくなった。特に大切なことは、インタビューイーにこちらの緊張感や不安感を伝えることがないように雰囲気作りにも気をつけないといけないと思った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
4	2012/2/28	講演	テルネットと世界災害語り継ぎ	八 木 勇 磨

関西福祉科学大学の派遣チーム、バックアップチームは2012年2月28日に兵庫県にある、阪神淡路大震災記念・人と防災未来センターで行われた、「Tell-Net フォーラム 2012 “震災の記憶・記録の保存と語り継ぎ”」の講演を聞きに行った。

13時から講演は始まり、オープニングで主催者あいさつとして、世界災害語り継ぎネットワーク(Tell-Net)事務局長の小林郁雄さんからのあいさつがあった。災害を語り継ぐことが今の日本にはとても重要であるという思いから Tell-Net を発足し、東日本大震災での支援を行って行く中で、阪神淡路大震災で被災を受けた者として、支援をしてもらった経験や教訓を生かし、それらを伝えていくこと、災害文化を世界へ根づかしていくことが重要であり、責務であると強く思ったとおっしゃった。

その後、基調講演として、貝原俊民さん・河田恵昭さん両名による講演が行われた。基調講演1では貝原さんの講演があり、その際キーワードに挙げられていたのは「想定外」という言葉であった。阪神淡路大震災ほどもでの地震は想定外だった。しかし、過去の記録(観測記録、日本史、自然の地震記録)を見れば想定できたのではないかとその中でも災害対策にあたった人がとった行動、考えなどの「人の営み」というものは日本史でしか残っていない。この「人の営み」というものを発信していく場を提供するために阪神淡路大震災記念 人と防災未来センターを建てて、学んだことを語り継ぎ、研究や提言をしてもらい、より多くのたしかな情報を発信するために役立てていきたいと話されていた。

基調講演2は河田さんが現場対応で得られた教訓などを講演されていた。何より一番大切なものとして挙げていたものは「命の尊さ」である。東日本大震災では、亡くなった方のうち高齢者の割合が高かった。例にあがっていた石巻市では、避難所まで800mもある距離を高齢者の方に歩かせて、避難に遅れてしまい、津波に飲み込まれるというケースがあった。これがもし、東海地震なら30万人は亡くなっていただろうと予想されている。こうならないように今回の教訓を生かさなければいけないのではないだろうか。そのためには、普段の防災教育で「命の尊さ」のHow toを考えさせるべきだとおっしゃっていた。近年、交通モラルの低下(ドライバーの法規無視)などから、命を軽く見がちな人が増えているなかで、「命の尊さ」を専用の施設やアーカイブスなど様々な形で発信していく必要があり、「日ごろやっていることしかできないし、やっていないことは失敗する」という言葉が印象的だった。

語り継ぐことの大切さというものはソーシャルワーカーの“声”プロジェクトに参加している私たちにもすごく共感できる部分だった。いかにして自分がとりこんだ情報をより正確に発信していくか、このフォーラムではたくさんのヒントがあったように感じられた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
5	2012/2/28	講演	津波の記憶・記録のミュージアム	八 木 勇 磨

派遣 A チームは基調講演の後、休憩をはさみ、パネルディスカッション第 1 部、「津波の記憶・記録ミュージアムの講演」で 3 人の講演を聴いた。このディスカッションでは、展示や文化財を通して復興、災害を語り、その上で大切な資料を保存・記録していくことに焦点がおかれていた。1 人目のラマダニ・バスさんは、アチェ津波博物館の館長でスマトラ島沖で起こった津波での経験・教訓を生かしていくため、災害を伝えるメディアとして、津波を忘れないためアチェ津波博物館を建設し、講演をしているというお話だった。

2 人目の熊谷賢さんは東日本大震災で、ダメージを受けた文化財を保存や修復をしていく文化財レスキューのお話をしていただいた。被災した標本を展示することで「ふるさとの”宝”は失われていない」というメッセージや「文化財が残らない復興は本当の復興ではない」といった言葉はとても印象的であった。

3 人目の橋本裕之さんは、震災や津波の現場から拾ってきたものを使った展示を行うという方法でメッセージを投げかけていた。さらに、それを強く訴えるために、五感に訴えかける展示にするという展示になっていた。ゴミや磯のにおい、暗い空間を作り、当時の状況を追体験させる工夫がなされていた。このような展示を、早く行うこと、何年先にも伝えていくことの重要性を語ると同時に、維持していくことの難しさも語られた。こういう震災の爪痕が色濃く残る展示は、「未来へ伝えていく」という点において非常に大切であり、人と防災未来センターのような、震災での経験を発信していける大きな建物は今後、東北にも必要なのではないだろうか。このパネルディスカッションを聴いて、この先、こういった形で震災を経験していない大人や、生まれてくる子どもたちに伝えていくかが、より大切であると感じられた。きっと博物館や文化財、展示というものは言葉とはまた違ったメッセージ性があり、時に被災者の言葉と同じくらい、見る者に訴えかけるものなのかもしれないと思った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
6	2012/2/28	講演	メディアによる 災害記録の保存と語り継ぎ	西 岡 なつみ

派遣 B チームはパネルディスカッション第 2 部「メディアによる災害記録の保存と語り継ぎ」を傍聴した。パネリストは須藤宣毅氏（河北新報社報道部記者）、安藤文暁氏（神戸新聞社会部記者）、近藤誠司氏（NHK 大阪放送局専任ディレクター）、コーディネーターは太田尚志氏（MBS ラジオ局番組センター（報道）プロデューサー）であった。阪神淡路大震災や東日本大震災において自らが取材をする中で感じた記録を残すことの重要性を、パネリスト 3 名が各々語った。そして取材を通して浮かび上がってきたマスメディアの偏在点を語った。

マスメディアの偏在点は、まず取材のエリアを選ぶのに注意が必要だという点である。特定のエリアを取材し、報道するためには人員と紙面が必要となる。東日本大震災では、取材でカバーできない地域があり、例えば東松島市では 1000 人もの犠牲者が出たにもかかわらず、ほとんど報道がされなかったため義援金に他の地域との落差がかなりあった。被災地から遠く離れた場所にいる視聴者は、メディアで報道された情報でしか被災地の現状を知ることができないため、たとえ時間がかかっても多くの地域の情報を平等に拾うことが重要なのである。

2 つ目に災害の「悲しみ」を語り継ぐだけでは不十分だという点である。メディアはどうしても被害のすさまじさや人々の悲しみに焦点をあてて情報を提供しがちであるが、本当に重要なのは、今後二度と同じ悲しみを繰り返さないために「地震が起きた時の人々の営み」を調査・検討し、「生き残るための術」を具体的に研究し、それを全国民へと提供していくことなのだ。具体的には、「安全な高台」とは地上何メートル以上の高さなのか、「海に近い危険な場所」とは海から何メートル以内の距離なのかを研究し、国民に伝えていくことが必要だろう。

3 つ目は、災害の映像が取り扱いが難しいという点である。映像には肖像権やプライバシーなどさまざまな問題がつきまとうため、得た映像を簡単に報道できるわけではない。そのため、本当に必要な情報や伝えたい情報を報道するのにも時間と手間がかかってしまう。

4 つ目は、震災から半年、1 年、10 年経過という区切りはメディアが勝手に作りだしたもので、被災者は意識していないという点である。よく「震災から〇年」という形でメディアは特集を組むが、被災者からしてみれば毎日が震災で破壊されたものの修復し作業や失ったものと向き合う戦いであり、震災から何年経とうと心の傷は癒えない。そのような人々を「〇年後」という節目だけ取り上げて報道するのは果たして正しいのだろうかという疑問が浮かんだ。

今回のパネルディスカッションおよび東日本大震災におけるメディアの動きを見ていて私が感じたことは、災害の記録を残すこと以上に大切なのは被災した方々のプライバシーを守ることである。震災後数日間、テレビは一日中いずれのチャンネルをつけても被

災状況を報道していた。つまり、それだけ多くの数の取材が被災地へと入っていたということである。不安や悲しみでいっぱいの被災者のもとへ報道陣が代わる代わる取材に訪れることは、被災者にとって負担やストレスの原因となり得るのではないだろうか。被災地の近況をいち早く報道することも大切であると思うが、被災者のプライバシーや心の傷に配慮することが第一に大切である。被災地から遠く離れた場所に住む人のもとにばかり被災状況が報道され、本当に情報を必要としている被災地の方々のもとに情報が届かないという事が決してないように、各テレビ局や新聞社が協力して必要最小限の取材を行うということも考えて良いと思う。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
7	2012/2/28	視察	人と防災未来センター	西岡 なつみ

派遣 A チームがパネルディスカッション第一部を聞いている間、私たち派遣 B チームは人と防災未来センター西館を見学した。1 階の総合案内フロアでは東日本大震災の展示コーナーが設けられており、被災した街並みや避難所、復興支援ボランティアの人々の作業風景の写真が数々展示されていた。

まず 4 階の震災追体験フロアでは、上映時間 7 分の「1.17 シアター」を鑑賞した。阪神・淡路大震災を完全に再現した大型映像と音響で、まるで今まさに地震が起きているのかと錯覚するほどであった。地震で破壊されていく街の様子は非常にすさまじく、恐怖でいっぱいになった。続いて、震災直後の街並みをリアルに再現したジオラマ模型を観た。暗く、どんよりとした空気だった。そのジオラマの街並みの中を歩いて大震災ホールへ入った。大震災ホールでは復興される街と人々を描いたドラマ仕立ての映画を 15 分鑑賞した。

3 階の震災の記憶フロアでは、震災関係の資料を提供者の体験談とともに展示していた。自らの被災体験を語り継ぐビデオ鑑賞コーナーもあった。膨大な数の資料があり、すべてをじっくりと拝見する時間はなかったのだが、復興過程の街、人々の姿から「明るい未来」を目指す力強さを感じた。

2 階の防災・震災体験フロアでは、まず災害情報ステーションで、世界で起きている自然災害について学んだ。自分が知っていた以上に世界各地でさまざまな自然災害が起き、甚大な犠牲者が出ていることに驚いた。また、南海大地震が起きた場合の津波の規模の範囲を表す地図があり、自分の住んでいる地域も危険だということが分かった。続



いて防災・減災ワークショップでは、マグニチュードのエネルギーをわかりやすく表したものなどゲーム感覚で地震に関する知識を学習することができた。耐震対策のコーナーもあり、家具転倒防止用具の紹介や非常持ち出し品のチェックリストも置いてあった。チェックリストによると 1 次持ち出し品はペットボトル飲料水（500ml）を 5 本、懐中電灯 2 個、携帯ラジオ 1 個、軍手・手袋 2 セット、万能ハサミ 1 セット、ロープ 7m を 1 本など計 31 点の物品が必要だとされている。これだけの物品をそろえ、災害時すぐに持ち出せるように用意してある家庭は果たしてどのくらいあるのだろうか。現に、私の実家はそのような非常持ち出し品は用意していない。

自然災害の発生は防ぐことはできないが、事前の準備や知識によって被害を少なくすることは

できる。人と防災未来センターではその「減災」という意識のもと、阪神・淡路大震災の記憶やそこから学んだ地震に関する知識を発信し、もう二度と同じ悲しみが繰り返されないように呼びかけている。現在、私たちがテレビや新聞から得られる地震に関する情報は「南海地震が今後〇年間に起こる確率〇%」など発生確率や被害の規模の予想などばかりで、その地震に備えて私たちは今何をすべきなのかという実践的な情報は得られない。そこに、地震が起こることを予期していたにもかかわらず被害を拡大してしまう落とし穴があるのではないだろうか。1日も早く、国民ひとりひとりが自然災害に対して備えることの重要性を認識し、行動に移せるように、私たちプロジェクトも何らかの取り組みをしていかなければならないと感じた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
8	2012/2/28	インタビュー	神戸養護老人ホーム住吉苑 伊賀浩樹氏 池田真知子氏	八木勇磨

阪神淡路大震災記念 人と防災未来センターで行われた、「Tell-Net フォーラム 2012 “震災の記憶・記録の保存と語り継ぎ”」の講演を聞き終わった後、派遣 A チームは遠藤先生の車に乗り、JR 住吉駅の近くにある、神戸老人ホーム 神戸養護老人ホーム住吉苑に行き、主任ケアマネージャーである、伊賀浩樹さん、池田真知子さんの 2 名に阪神淡路大震災当時の状況や行った支援についてインタビューを行った。

震災当時、建物が木造建築であったため、倒れてしまい、そこに住んでいた 30～40 人の方が住めなくなり、鉄筋棟の食堂に移り木造建物にあった畳を食堂に敷き、簡易の避難所を作ったり、鉄筋棟の部屋を 4 人部屋のところに 6 人で住んでもらったりして、老人ホームにいる利用者 110 人を避難させた。電気、ガス、水道が止まって、暖房設備が使えない状況であった。幸いなことに蔵の中に毛布



や布団や、ちょうど敬老の日にもらったカイロを利用して寒さ対策をしていたが、やはりちゃんとした部屋ではない食堂などでは、1 月ということもあって寒さは厳しかった。食事の面でも幸いなことに、お正月にお餅つきで使った窯で廃材を燃やしご飯を炊くことができた。朝は何日分が残しておいたパンと牛乳、昼に作ったおにぎりとお味噌汁で 2 日しのぎ、3 日目からはお弁当が運ばれてきた。老人ホームということもあり、比較のお弁当などの物資が早く来たそうだ。

震災の日、住吉苑の職員は、住み込み 2 名、宿直 2 名、朝出勤した池田真知子さんの 5 名であとは数名駆けつけた。あとの他の職員は、電気が消え情報が入らないので被害の状況がわからなかった。西宮に住んでいた園長より、「西宮でこんな酷いなら神戸も酷いから行かなくていい」という指示があったが、来られない状況の住吉から遠い職員もいた。近隣の職員で来る途中にけがをした職員もいたが駆けつけた。

電気の復旧は震災から 3 日後と早かったが、それまでは区役所に行っても電池はもらえず、電池の節約を心がけていたそうだ。「寒い夜の電気のない生活は辛い」と伊賀浩樹さんはあらためて言われた。

被災した状況下で、利用者さんが求められたものとしては、温かい食事であった。おにぎり

や、お弁当はどうしても渡す時には冷たくなってしまい、高齢者の方々には厳しく、お弁当をおかゆにするといった工夫をした。また、炊き出しの際、避難所に行く途中の避難者の食事を求める声や、水とお湯を交換してほしいという要望もあったという。1月の厳しい寒さをしのぐためだけでなく、心を落ち着かせるためにも温かい食事というものが求められていたのではないかと感じた。

情報は電池で動くラジオで収集していたが、どれほどすごいのか規模がわからなかった。携帯電話は繋がりやすかったが普及はあまりしていなかった。

震災のショックで湧水が出て、近隣の人々はそれを利用して生活用水にしていた。水は備蓄できず大変貴重であったため、お風呂には全然入ることのできない状況が続いた。自衛隊が用意したお風呂もあったが、深いため、高齢者の方々は入ることができなかった。

高齢者の方々は動けない状況にあり、老人ホームの職員も奔走していたため、利用者の相手をすることもできない程忙しい状況だったが、戦争で空襲を経験しているため、「戦争と同じこと」とおっしゃっていたようで、耐えることにとっても強く、避難所ではなく老人ホーム暮らせることだけでもとてもありがたかったとお話していたそうだ。その時のことをふり振り返りながら、「高齢者には体育館での避難所生活は無理だ」とお二人とも口をそろえて言った。

ボランティアの方が一度にたくさん来てくださったことはありがたいことであったが、それを整理(コーディネート)するのが難しかった。施設内で、職員は利用者さんで手一杯なので、ボランティアの方の指示まで手が回らず、「何をしたらいいか？」と聞かれてすごく困ったため、相手(支援される側)の意向を聞いたうえでボランティアを調整する役割を持つ人が必要と感じたそうだ。

他機関との職種の連携として、当時は現在のように職種に区切りがなく全体で協力していく形となっていたので連帯意識が高く、社会福祉士としては行政とのやりとりなどが専門的な連携だと感じたという。

被災後は、資源が限られていたが、伊賀浩樹さんの友人から野菜やオムツ、ウェットティッシュが送られてきてとても助かったそうだ。日用品として紙皿にサランラップを巻いて紙皿を汚さない工夫などをしていて、サランラップはとても便利であったようだ。ゴミは燃えるものは燃やして暖をとるのに使っていたが、それ以外はため込み、震災時にはゴミの処理に際して、事故があったそうだ。

震災時に専門職だから出来ることは何ですか？という質問には、次のように答えられた。現地にいるソーシャルワーカーの方も被災している中で情報整理をすることはとても難しいので、情報整理、課題整理は第三者が行うべきではないかということ、医療では災害時に迅速に対応する機関があるが、福祉の分野でもそのような機関があればいいのではないかということ、専門職の方の話を専門職の方が聞いてあげることが大切なのではないかということ、震災時でも介護が必要な人がどこにいける介護保険制度の大切さ、様々な職種との横のつながりの大切さなどが挙げられた。また、専門職だけでなく、人と人とのつながりで支援の輪が広がったと感じたそうだ。また震災が起こった当時はみんなが優しくなって協力的だったが、震災を経験していない人が増え、職員の意識も薄くなっているとお話されていた。震災を忘れないように、住吉園では年間備蓄した食べ物を1月17日に食べる行事があると話されていた。



最後に一言として、お二人から、「人と人との繋がりは大切」、「みんな必ず孤独ではない、援助は必ずくる」、「命は大切であり、いざとなったら発揮できる人間のパワーはすごい」という言葉をいただき、インタビューは終了した。

この日が初めてのインタビューだったのでとても緊張したが、本当に貴重な体験だった。17年も前のことを思い出したくないことかもしれないのにお話してい

ただけたお二人には本当に感謝しなければいけないし、そこから見えた人の力というものを感じた。震災当時の状況がとてもわかりやすかったし、ソーシャルワーカーとしての動きもわかりやすかった。人を助けるのはやっぱり人であって、繋がることの大切さを改めて感じる事が出来た。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
9	2012/2/28	インタビュー	神戸市保健福祉局監査指導課 (当時：神戸市灘福祉事務所) 加藤和彦氏	西岡 なつみ

派遣 B チームは神戸市保健福祉局監査指導課の加藤和彦さんにインタビューを行った。加藤さんは、約 12 年間児童養護施設「子どもの家」で児童指導員を経験し、平成元年に灘福祉事務所で生活保護のケースワーカーを 12 年、兵庫福祉事務所生活保護ケースワーカーを 6 年、介護保険課を 1 年、そして現在の監査指導課に就いて 5 年目である。阪神・淡路大震災が起きた時は灘福祉事務所で生活保護ケースワーカーをしていた。

はじめに、地震が発生した時にどのような支援活動をされたか聞くと、加藤さんはこれから震災当時の事を語るにあたって「涙ぐんだりするかもしれない」と前置きし、笑いながらも深刻な表情になった。

加藤さんらの活動は支援と言うより救助に近かった。神戸市には防災（対応）マニュアルがあつてどの部署がどんな仕事をするか平時からあらかじめ決められており、福祉事務所は遺体安置が担当だった。しかし、加藤さんは救援物資を避難所に配る仕事についた。それは子どもが戸板に乗せられて運ばれてきた瞬間にそれが遺体だと気付いた時、自分が遺体を見たら動けなくなるだろうと思ったためである。その時は、職場の誰も大規模災害が起こるとは思っていなかったため、自分たちの仕事が遺体安置だとは誰も思っていなかったし知らなかった。加藤さんは、自分には遺体安置の仕事をすることが難しいと悟り、スッと遺体から“逃げた”。逃げたこと、職場の仲間と苦労を共にできなかったことがトラウマとなり、去年・おとしまで大変つらかったそうだ。公務員は震災直後、市民のためにすぐさま動かなければならないため、初動の一步が大事だとおっしゃった。例えば、家が全壊してすぐに職場に行けなかったという当たり前のことも「他の仲間がすぐ職場に向かったのに自分が出遅れた」とずっと後までトラウマになり、何カ月も仲間と打ち解けられなかったそうだ。

震災 1 日目まだ全く物資が届いておらず神戸市と協定を結んでいたコープ神戸（生活共同組合）がパンなどを持ってくるが、それをどう捌いたらよいのかわからなかった。また餅や味噌など店舗にあるものをとにかく何でも持ってくるため、どうやって食べればよいのかと途方に暮れながらも、仕方がないため配った。それを受け取る人々は茫然と幽霊のように歩いていったそうだ。1 日目の夜にトラックで少しずつ物資が届き、それを下ろす作業を行った。とにかく当事者は今何が起きているか全体像がつかめず、加藤さんもテレビを見たのは 1 年後の特集番組だったそうだ。

2 日目は全国から物資が届いたため、トラックで区役所に運んだ。4 台しかない区の手を使ひ、連絡があつた 10 件ほどの避難所に届けた。王子競技場にヘリコプターから物資が降ってくるが、みんな初めてのことであるため配り方が分からず、物資の争奪戦となったそうだ。そのような状況の中だったが、リンゴ一箱を 3000 人避難している小学校に届けたところ、若者が「リンゴ 1 個を 8 等分して子どもと年寄りが先や」と配ってくれ、8 等分したものが 1 日目の夕食となった。加藤さんはその若者の行動に「世の中捨てたもんじゃない」と感動したそう

である。また、各家庭や学校で婦人会の方がおにぎりやをにぎってくれた喜びも涙をこらえながら語ってくれた。

3 日目、物資を捌き切れない状況を見かねた加藤さんはラジオでボランティアを募集した。するとラジオを聞いた人がたくさん駆けつけた。ボランティアに物資の係を割り振って手でバケツリレーのように種類ごとにトラックに積んで運んだ。避難所の数は区の災害対策本部から随時情報が入るようになり、直接物資を貰いに来る人には「ごめんなさい。ここでは渡せません。避難所で登録してくれたら物資は渡します」と断ったそうだ。それは援助者が混乱して統率できなかったら物資なんて届かないからだという。

1 日目は家に帰って少し寝たがそれから不眠不休で食事の時間がなく、自分が痩せていることも気づかないほど支援に突っ走っていたそうだ。加藤さんは役所の人間ゆえ市民の方が倒れたらいけないと思い、市民には「今日はもういいですから帰りましょう。明日またお願いします。」と夜 10～11 時に帰ってもらったが、自分はそれから作業を続けた。初動対応はボランティアを呼んで乗り切った。3,4 日目から応援に駆けつけた方が地域のすべての住宅を 1 軒 1 軒訪問して情報収集してくれた。運送は地元の業者が支えてくれ、中小の業者はいざという時に街を支えてくれるから大事にすることだと教えてくださった。

3 日目以降は応援の職員がどんどん入り拡声器で「弁当あります」と家にいる方に配った。それと同時に通れなくなった橋や道など街の被災状況を全部地図に起こしていき、どうやらそこに行けるかを集積していった。自分で今考えてもよくやったと自負されていた。また、「生活保護のケースワーカーの強みは、日常仕事で家庭訪問するから街を知っているということだ。区役所の人は地名は知っているが場所を知らないからいざというとき役に立たない」と加藤さんは語る。

加藤さんは同時に避難所で初めての心のケア「聞き取り」を開始した。話すことで悲しみの感情が爆発できるそうで、子どもを亡くして絶望する親御さんの話もたくさん聞いたが「大好きだった王子公園で棺に入れるなんて子どもたちも本望です」と話す親御さんを目の前に加藤さんは「この状況でそんなことが言える人がいるなんて、人間ってすごい」と魂を揺さぶられたという。「嫌な思いもいっぱいあるけど人格の素晴らしさってこういうことを言うのだ」と気づかされたそうだ。さらに上司から「いっぱいお茶飲んで一休みしなさい」と人間の優しさ素晴らしさを体で教えてもらった。

震災から 1 ヶ月後くらいに神戸大学の学生が「一人暮らしの老人の名簿をください」と尋ねてきたが「プライバシーがあるからそれはできない」と断った。しかし、「困ってる人がいるのに放っておくんですか」と一歩も引かないため訪問台帳をつくることを提案した。ケースワーカーが住所・名前・質問を書いてボランティアが調べて帰って来る。必然的にカンファレンスをする事になり、支援を必要とする住民の情報が集まりそれを整理して必要なところに繋いだ。しかしボランティアは長期的に存続することができないため、公にボランティアセンターを作ってもらおうよう頼んだ。

神戸は 6 月に仮設住宅ができて 8 月には避難所を閉めた。加藤さんは障害者高齢者向け仮設住宅を担当した。単身 4 畳半、家族持ち 6 畳でトイレ、風呂、台所は共同。60 戸に 1 人のライフサポートアドバイザー (LSA) が張り付いていた。精神障害者の中には、不調で暴れだす人もいたし、アルコール依存症の人の中には飲んで騒ぐ人もいたし、認知症の高齢者もいて多

忙だったという。そこに全国の PSW（精神保健福祉士）の団体がボランティアで土日入ってくれ、ケース検討会で保健師、生活保護のワーカー、LSA、PSW がそれぞれの立場からどうしたら当事者が飲酒せずに過ごせるか、通院してもらえるか考えた。また仮設住宅の中でアルコールミーティングを月 2 回行い専門機関を繋いでいった。専門職同士が繋がってカンファレンスし、対策を立てて他機関に繋ぎ、情報を知らせていくことがとても大事であり、加藤さんは“連携の作法”仮設住宅担当の時代に身に付けたそうである。復興住宅でも、結び、繋ぎ、知らせて自立のサポートをするという仮設と同じような仕事スタイルであった。加藤さんの仕事のスタイルや価値観は震災の経験の中で見出したものだろう。

また震災の前後で考え方に変化があったか聞くと、故郷や親に対する気持ちが一変したと語ってくれた。故郷が自分にとっての拠り所だったことに気づき、人間にとって大事なことは人と人との「つながり」だと肌で感じ、「人は繋がって生きる」ということが加藤さんにとって猛烈に堅い信念となりこだわり抜いているそうだ。人と繋がるのがすごく困難な今の時代で、東北の方々も計り知れないつらさを抱いていると思うが「一人で仕事をしているんじゃない」ということを伝えたいとおっしゃっていた。

そして東北へインタビューに行く私たちへのアドバイスをお聞きしたところ、東北の方々は一話することが身を切るほどつらいだろうと教えてくれた。助けられなかった自分、役に立たなかった自分という自己否定やトラウマがあり、そこをどんな風に共感できるか、共感できなくてもどう寄り添えるかが重要で、しかし一方で話して楽になりたいという気持ちもあるためしっかり話を聞くようにとアドバイスをいただいた。加藤さんも「語らないことが死んだ人に対する礼儀だと思っていたし、二度とこんなことが起こると思っていなかったから誰かと経験を共有する必要なんてないと思っていた」と語った。しかし「経験を話していたら少しは役に立ったかも」と後悔の念も抱いているようだった。

最後に、今の復興した神戸の街を見て感じることはあるかとお聞きしたところ、綺麗になった街並みに「よくここまで来たなあ」と感じることに、また「震災の体験を語り繋ぐのは震災の事実を繋ぐことではなく、人と人が繋がること、結びつくこと、相手の気持ちを思いやることを大事にすること、そういう街を作っていかなければならないしそういう価値観を語りつなぐことが震災を経験した世代の務めだと思う」と語ってくれた。震災



で何があったかの裏側に、どんな思いで人間が生き何が大事だったかを表せる街にしたいと考えているそうだ。その意思を若い世代に受け継ぐ重要性も感じているらしい。

震災から 17 年経った今も身を切るような思いで語る加藤さんの姿に、震災で負った心の傷の深さを感じた。加藤さんがどん底の状況から這い上がることができたのは、「つながり」があったからで、そう考えると復興支援において、常に人間と向き合い人々の生活を支えるソー

シャルワーカーの役割はなくてはならないものだ」と痛感する。震災を経験した人々の想いを私たちが繋ぐことはこのプロジェクトの目指すところと一致しており、私たちが“ソーシャルワーカーの声”を発信していくことの重要性を感じた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
10-①	2012/3/5	座学	ソーシャルワーカーの業務A	西 畑 知 美

今日は、介護保険制度について資料をもとに学び直し、その後 地域包括支援センターについて学んだ。簡単に説明すると、まず、介護保険制度に関しては、次のようなことを学んだ。

(1)法制定の背景：社会全体で介護を支えていこうとする仕組みの必要性である。(2)法改正の流れ：1997年12月に制定され、2000年4月からスタートした。改正法案は2005年6月22日に成立し、2006年4月に施行した。(3)保険財源と運営・加入のしくみ：①保険者は市区町村で、保険を運営する者に当たる。②被保険者は40~65歳未満の保険に加入して保険料を負担する者である。(4)保険給付の対象者：被保険者は、「第1号被保険者」(65歳以上)と「第2号被保険者」(40歳以上65歳未満)に区別される。(5)保険給付の流れ：申請を行ってから、要介護認定を行い、居宅サービス計画等(ケアプラン)の作成となる。(6)利用者負担：支給限度額の範囲内での利用が保険給付の対象となり、利用額の原則1割を利用者が自己負担する。(7)サービス体系：①介護給付=要介護者を対象とした給付(介護サービス)②予防給付=要支援者を対象とした給付(介護予防サービス)③地域支援事業=保険給付(介護給付と予防給付)とは別に、被保険者が要介護状態又は要支援状態(以下、要介護状態等)になることを予防するとともに、要介護状態等になった場合においても、可能な限り地域で自立した日常生活を送れるよう支援することを目的とした、区市町村が支援する事業。この地域支援事業には、介護予防事業と包括的支援事業、任意事業がある。

次に、地域包括支援センターに関しては、以下のようなことについて学んだ。(1)地域包括支援センターとは：高齢者、家族の介護に関する相談窓口である。被保険者が職員に相談等を行った際、地域包括支援センター運営協議会が中立性の確保のために選定する。(2)設置基準および設置主体：設置主体は区市町村が直接実施することが原則だが、法人に委託することもできる。(3)しくみ：職員配置は、①保健師②社会福祉士③主任介護支援専門員を配置。主な業務は介護予防に関すること、高齢者の総合相談に関すること、権利擁護に関すること、包括的・継続的支援に関すること。

介護保険制度は、一回授業で学んだので分かるだろうと思ったけれど、改めて見直すと記憶から抜けている部分がたくさんあって少しショックだった。今日の事前学習で介護保険制度の必要性と地域支援事業と地域包括支援センターの役割について確認出来た。今回の震災でも介護保険制度は重要な機能を担っているし、これからの日本には、高齢者が急激に増える中で、制度を必要とする人が増えてくるだろうから、よく学んでおく必要があるなと感じた。特に、予防給付と介護給付については中身が全然違うし、予防することを重点的に支援していくことが分かった。又、地域に根付いた支援を、普段どれほど行っているのかで、今回のような震災があった際、出来る支援や援助も変わってくるのだろうと感じた。今日の講義は重要な点を中心にサッと学びなおしたのだが、大切なものばかりだと感じたので、資料を見直し、学んだことをもう一度よく勉強し直さないといけないなと思った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
10-②	2012/3/5	座学	ソーシャルワーカーの業務B	師 岡 彩 音

今回の事前学習では、介護保険制度と地域包括支援センターについて成清先生より講義をしていただいた。その後、2月28日に行った阪神・淡路大震災で活動経験のあるソーシャルワーカーへのインタビューの振り返りをした。

介護保険制度と地域包括支援センターについて、宮城県でインタビューをする際に地域包括支援センターとは、どのような役割を担っているのか、その中でソーシャルワーカーは実際にどのようなサービスを提供しているのかなどを事前に学んでおくことで、震災時に求められるソーシャルワーカーの業務や役割を考えることに繋がり、より中身の濃い質問や理解ができると感じた。また、介護保険制度については授業などで学んではいたが、2005年の介護保険法改正により地域支援事業、介護予防への対応がどのようになされたのか、介護保険制度による地域包括支援制度の位置づけなど、理解しきれていない部分があったので、改めて学ぶことができてよかった。

振り返りでは、質問するタイミングが難しく、話の間で質問できなかったとの反省点から、まずは世間話など場を和ますような会話から入り、何のためにインタビューをするのか、その目的をしっかりと持ちどんなことを聞きたいかをはっきりさせるなど、今後の改善点などを話合った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
11	2012/3/12	その他	交流会	原 佐知子

JR 仙台駅に到着し、昼食をとり、その後 JR 仙台駅の周辺の街並みを観察し、散策する。東北自治体総合研修センターへ向う途中に周辺の街並みを観察した。その中で、震災の被害の爪痕を発見する。東北自治体総合研修センターに到着し、東北自治体総合研修センターの図書館で学習を行う。その後は文京学院大学チームと教員との交流会を行い、親睦を深めた。

JR 仙台駅の周辺は、都市が発達している印象を受けた。映画も上映され、飲食店など多くの店舗があることに気付いた。JR 仙台駅の周辺には人も多く賑わっている印象を受けた。

東北自治体総合研修センターに向かう途中に道路にヒビがはいっており、ヒビを埋めたところを発見した。道路に出来たヒビは震災の際に



できたものではないかと思われた。そのヒビの長さや規模から震災の被害の大きさをうかがい知ることが出来た。地震の影響として、東北自治体総合研修センターにも壁の一部がはがれ、「落下注意」の張り紙がされていた。センターの職員の方によると、震度6の地震の影響で壁がはがれたという話を聞くことができた。建物が鉄筋で出来ているかどうか被害の状況に関係するという話を聞かせていただいた。被害の大きさは建物の状況によっても左右されることがわかった。

交流会では、文京学院大学と関西福祉科学大学の学生と教員とでソーシャルワーカーの“声”プロジェクトを協力して行っていくために親睦を深めた。関西と関東の文化や言葉遣いの違いなど学生同士で様々な話をすることができた。また、ソーシャルワーカーの“声”プロジェクトに参加した経緯などについて話をした。フィールドワークが始まる前に交流を深められたことは、フィールドワークを共に行う仲間としての意識を強めるきっかけになったと感じる。

また、普段は多く話す機会のない教員の方々とも、交流会を通じて話をする機会が持てたと感じている。大学の中では、話す機会がなかった教員とも話をすることで教員の新しい一面を見つけることが出来た。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
12	2012/3/13	座学	ソーシャルワーカーの”声” プロジェクトについて	八 木 勇 磨

12日から本格的にプロジェクトが始まり、関西福祉科学大学、派遣A・Bチーム、文京学院大学のチームは座学を中心に学習を行った。

9時から関西福祉科学大学の遠藤洋二先生から、このソーシャルワーカーの“声”プロジェクトについての座学が行われた。遠藤先生は、自らの経験や視点、考えから、このプロジェクトの内容を話してくれた。遠藤先生自身も、阪神淡路大震災で被災され、現実とは思えない映画のような光景や人を助けようと瓦礫をどけようとしてもビクともしない状況で、「圧倒的な無力感」を感じたと話していた。さらに、水を運ぶ仕事や、死者のお棺を作る仕事をしている中、ソーシャルワーカーとして本当にこれでいいのか？ソーシャルワーカーの仕事をしているのか？と考えていたが、遺族に寄り添い話を聞くなど、専門性の役割もあったと当時をふり返られた。



東日本大震災のような大きな災害での支援(危機介入)の場合、ニーズを聞いて支援していくのではなく、「これができる」とニーズを提示して、自分のできる支援をすることが大切である。また、被災者のニーズは人によって山ほどあるので、一人ひとりにアセスメントをして課題を見つけ、それを受け止め、情報を発信して支援につなげていくこと、そして、専門性のスキルと感性を持って、困っているから手を差し

伸べるのではなく、彼らの持っている力を元にエンパワーしていくことが大事である。そして実際、阪神淡路大震災でも東日本大震災でもソーシャルワーカーは誇りをもって被災者の生活を支援するための活動をしてきたが、メディアは「こころのケア」の一言で片づけてしまうため、ソーシャルワーカーの仕事が見えなくなっている…だからこそ見えてない状況に光を向けるため、このプロジェクトがあり、これから災害での支援抜きでは考えられない時代に、ソーシャルワーカーのプロを志す私たち学生が発信して支援していくことに大きな意味があると遠藤先生はおっしゃっていた。

先生は、阪神淡路大震災のお話を事前学習の時にもお話されていて、「圧倒的な無力感」、「自分には何もできない」といった言葉をキーワードに挙げられた。事前学習の時は、想像やテレビで見るだけでイメージするのが難しかったのだが、11日の東北自治体総合研修センターへ向かうバスで見た、ひび割れたアスファルトやタイルが剥がれた柱などを見て、少しだが、自分の中で現実味が帯びてきたような気がするよう感じられた。このプロジェクトを通して自

分に何が伝えられるだろうかと考えた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
13	2012/3/13	座学	東北福祉大学の取り組み	泉 綾 子

東北福祉大学で災害ボランティアについての講義やボランティアのコーディネートを担当している鶴橋徹さんから東北福祉大学の取り組みについて配布資料に沿って講義を頂いた。

東北福祉大学のボランティアの取り組みの始まりは阪神淡路大震災で、学生が現地でのボランティア活動を始め、そこから大学全体でボランティア組織を作り、支援活動に取り組むようになった。組織は災害時に随時立ち上げている。

今回の東日本大震災でのボランティア活動には1年間で3,800名ほどの学生・教職員が参加した。

これまで取り組んできたボランティア活動のうち12の活動について、配布資料に沿って説明して頂いた。特にライフラインが整っていない3月から4月上旬にかけては医薬品の荷降ろしを行った。不定の時間に各地方から届けられる医薬品の荷降ろしを職員の代わりに行うことで、職員の積み重なる疲労を軽減できるよう活動された。また、ボランティアが使用したスコップなどの



の資材の泥を落とす活動などをしてきた。災害支援が円滑に進むとしてボランティア学生自身が達成感、充実感を得たそうだ。他にも津波によって流された写真を一枚ずつ洗い、持ち主が見つかりやすいようにとデータ整理をおこなった。ある女性が洗い場にあらわれて、「孫の写真が見つかった、本当にありがとう」と声をかけてくださった。そのあと職員方から女性の孫が津波で行方不明であることを伝えられ、ボランティアをしていた学生は喜びと悲しみの入り混じる思いをしたそうだ。

現在、復興支援の一つで「復興商店街」のボランティアを行っている。このとき商売の手伝いを「ボランティア」と呼んでもよいのか、自立の妨げになるのではないかという見方もあり、ボランティアとして復興商店街の手伝いをすることを決断するのに頭を抱えたという。そのため今は、休日などお客の多い日のみ手伝いに入るようにしているそうだ。ボランティアを行う上での課題は、自立を妨げる支援にならないよう、バランスが大切だとのことだった。



所感

東北福祉大学はボランティア活動を行う際、OBや地域の人脈を活用できていると同時に、日ごろから継続的にこれらの人々と何らかのつながりがあったのかなと思った。また、印象に残ったのは、県行政や薬品企業からくる薬品の積み降ろし作業を担う薬務課の手伝いを学生が交代で行ったことである。災

害時、職員はとにかく動き続けるしかないのだが、職員の負担を軽減するために依頼を受けて活動されたそう。このことから、現場で働く人を支えるボランティアも重要な役割があるのだと感じた。

お話の中で、「被災者の自立を妨げないためのボランティアのバランスを考えることが重要だ」とうかがった。災害によって本来人々が持っている力が出せない中、ボランティアの介入や終了のタイミングを考える必要があるのだと思った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
14	2012/3/13	座学	日本社会福祉士会の取り組み	八 木 勇 磨

フィールドワークの三つ目の座学として、文京学院大学の先生であり、日本社会福祉士会の会長である、山村睦先生から日本社会福祉士会の取り組みを聞かせてもらった。

はじめに、日本社会福祉士会がこの一年間行ってきたことを東日本大震災当時の写真や、支援を行っている写真を壮大な音楽とともにまとめた映像を見せてもらった。この映像からでも震災の爪痕、山村先生をはじめとした日本社会福祉士会の方々の想いやたくさんのソーシャルワーカーが支援を行っていたことがわかった。その後、詳しい説明を社団法人日本社会福祉士会の災害対応活動という演題でパワーポイントを使って講義してもらった。

復興から元の生活、それ以上の生活になるには5年、10年と長い時間がかかるなかで何ができるか…。まず「支援の基本的な考え方」として、ソーシャルワーカーを生かす活動、被災地が主体となる支援であること、終了を見据えた継続的な支援であること、そして「支援活動の柱」として、被災地における被災者支援、被災地県外の遠隔地における支援、子どもたちが良い生活を送れるようにスクールソーシャルワークの係る支援が挙げられた。



実際の活動としては、震災が起こった2011年3月11日の夜には日本社会福祉士会の集まれるメンバーで集まって話し合い、翌日の3月12日には、日本社会福祉士災害対策本部を立ち上げた。そして3月20日に現地へ赴き、現地で支援活動を行っているソーシャルワーカーへの支援や他機関との役割分担などよりよい準備をするための支援方策を岩手・福島の県士会との事前協議を行った。震災直後、すぐにでも支援してほしいという依頼が来たのだが、きっちり準備してから支援を開始するという形をとり、3月30日からボランティア登録を開始し、4月1日から宮城県東松島市地域包括センターへソーシャルワーカー2名を派遣し、支援をスタートさせた。活動の終わりも現地の県士会と話し合いの上で行っている。支援の一つとして、ボランティアのしたいことと、被災者のニーズにずれがあり、そのずれをうまくコーディネートしていくことが挙げられた。

活動のスキームとして、1クール5～7日でボランティアをし、1日目と最終日に引き継ぎ日を作り、次のチームが支援できるように継続的支援を行っている。活動内容は、アセスメント、居場所確認や相談対応などが挙げられる。また、東松島市で花の苗を配り一緒に育てる活動「おひさまサロンプロジェクト」へも協力して、地域への仕掛けを作ったり、その中でも、相談援助を行ったりしている。



留意点として、マイナスイメージの発言をしないこと、自信を持って支援に臨むこと、現地のワーカーへの心遣いなどが挙げられた。

継続的な活動というのはソーシャルワーカーの“声”プロジェクト”でも言えることではないかと感じ、バックアップチームにしっかり引き継ぎたいと思った。ソーシャルワーカーはどういった支援を

いかに行っているのか、私たちは知らない部分がとても多く、山村先生の講義をふまえながら、これからソーシャルワーカーの活動についてインタビューを行っていくことがとても重要になってくると考える。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
15	2012/3/13	座学	東日本大震災における ソーシャルワーカーの活動	泉 綾 子

宮城県サポートセンター事務所所長、鈴木守幸社会福祉士から東日本大震災におけるソーシャルワーカーの活動について、配布レジュメに沿って講義を頂いた。

市町村に作られたサポート支援センターの後方支援のために、宮城県は、宮城県サポート支援センターを作った。仮設住宅以外のみなし仮設、在宅など被災者の生活場所はさまざまであり、それに対応するためにサポートセンターを設置した。

設置主体は市町社会福祉協議会が多く、NPO や社会福祉法人、民間会社の場合もある。しかし何を担うかということが明確にされていなかったため、運営の仕方はさまざまであった。従業者は生活相談員、生活支援員、友愛訪問員などで、まとめて Life support adviser、LSA と鈴木さんは呼んでいる。ここでの課題は支援者としての共通理念が統一されていないことであった。被災者の生活再建、自立に向けた支援を共通理念として認識できなかったため、何を根拠に、どこまで支援を行うのか、などの迷いが現場で起きていた。従業者は被災者が緊急雇用されている場合も多く、どこと連携をとればよいのかわからず、ネットワークが弱かった。社会福祉士の資格があるなしにかかわらず、現場の従業員、ソーシャルワーカーを平時から大切にして、ソーシャルワーカーが協力機関につなぐことができるよう、いかにアクセスさせるかという点が重要だった。今後は支援者間の連携した総合的な支援体制の確立や、コミュニティー作りのサポート、支援従事者への研修を行い、対人援助の視点やスキルの向上を図りたい。そして、サポートセンターの位置づけの明確化も必要だ。

市町のサポートセンターのバックアップは本来、地域住民の生活に最も近い存在である都道府県社共が担うべきところだったが、宮城県社会福祉士会が受けた。いつまでもこの仕事があるわけではないし、いつかは社会福祉協議会にこの役割を渡すことになるので、悔しさと腹立たしさも感じられていた。こうした思いを抱いた自分たちが社会福祉協議会の若い人を中心に意見を交わしながら状況を変えていきたいと思っているそうだ。

また個別支援「被災者の生活再建に向けた総合相談対応」に向けて、弁護士、社会福祉士、ケアマネージャーなどの専門職の相談対応チームの編成をし、市町ごとに各専門職の担当を配置、対応をした。法テラス南三陸には、弁護士と社会福祉士がおり、被災者の生活課題に対応している。

鈴木さんは震災直後自宅にいたが、何をすべきか分からなかったことを情けないと感じている。瞬時に想像力を働かせるためにも平時からの取り組みが重要だ。その平時の取り組みとは福祉の活動家であることだ。鈴木さんは小湊さんという社会福祉士をスーパーソーシャルワーカーと呼んでいる。小湊さんは社会福祉士であり、ケアマネージャーでもある。平時から同僚ケアマネージャーがどこで何をしているのか把握していたために、震災直後はガソリンの調達、ケアマネージャーと連絡を取り合い高齢者の安否確認、高台への避難誘導を行った。小湊さんの働き、指揮がなければ宮城の活動は停止していたというほど、小湊さんの瞬時の動きは同じ社会福祉士として頼りになったそうだ。

所感

鈴木さんの講義のはじめが、「被災地をちゃんと見てください」という言葉であった。ソーシャルワーカーの話、被災地の現状について話を伺えると思っていたが、一番初めの言葉に頭を強く打たれた。地域が津波で流され、平時では当たり前にある通信手段や交通手段も何もなくなったときに一体何が私にはできるのかという想像を現地での課題にしようと思えた。また、私はこれまで、一人の社会福祉士の行動、ソーシャルワーカーの取り組みを見ようとしていた。それはもしも自分がソーシャルワーカーなら緊急時に何ができるか、と考えていたからだ。しかし、自分自身の取り組みの一つとして現場で働くソーシャルワーカーとの知識、技能、価値観などを共有する研修会を行ってきたと伺い、平時からのネットワーク作りやそれらを機能させるための取り組みの必要性を感じた。この講義を通じて、社会福祉士の役割は対人援助だけではなく、現場で働くソーシャルワーカーの支援が含まれていることとその必要性を感じることができたように思う。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
16	2012/3/13	その他	宮城県社会福祉士会訪問	原 佐知子

関西福祉科学大学A・Bチームと文京学院大学の各チームの代表者2名ずつの6名と遠藤洋二先生と山村睦先生と共に宮城県社会福祉士会に訪問した。宮城県社会福祉士会の事務局長の高橋達男氏は、今回のソーシャルワーカーの“声”プロジェクトでインタビューさせていただくソーシャルワーカーの紹介など大きな協力をいただいた。高橋さんは個人の別邸を事務所として解放されていて、訪問も別邸の事務所を訪ねた。事務所には常時一人はスタッフが待機しており、1年経った現在でも連絡や様々な事態にしっかりと対応出来るようになっていた。

訪問させていただいた理由はソーシャルワーカーの“声”プロジェクトに協力していただいたお礼を述べることに、これから被災地に入る挨拶に訪れた。被災地に入る前に一人ひとりが被災地に向けた意気込みを発表すると共に、13日の講義の内容で感じたこと、考えたこと、学んだことなどを述べた。高橋さんからは被災地をしっかりと見てほしいということと、色々な人に被災地に来てどのような状態になっているのかその目で見て欲しいという言葉いただいた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
17	2012/3/14	視察	東松島市大曲地区	西岡 なつみ

私たち関西福祉科学大学の学生 8 名と文京学院大学の学生 4 名は午前 10 時前、教員の運転する 3 台のレンタカーで宮城県東松島市へと到着した。街の道路は津波後に舗装されたのか綺麗に整えられていたが、少し視線を道路の脇にずらすと勢いよく折れ曲がったガードレールが目飛び込んできた。「ここも津波がきたのだ」と一目でわかり息を呑んだ。道路沿いに田んぼや畑があったが、農作物が植えられている様子はなく、水はけが悪く褐色の水たまりができていた部分も多数見られた。津波が来た際に海水はもちろんさまざまな廃棄物なども流れてきたことによって土が汚染されてしまったのだろう。「この畑にはもう作物は実らないのだろうか？」…そのようなことを考えながら、東松島市で特に被害が大きかった大曲地区へと車を走らせた。

大曲地区へ到着したものの、ここが本当に大曲地区なのかどうかもわからないくらい建物も標識も何もない。あたり一面、津波によって運ばれてきた土砂と破壊された家屋が散乱し、津波の爪痕を残しながらもなんとか耐えて建っている家が点在していた。津波が来る前、この街がどのような街並みだったのかが今となっては全く想像できない。



いがれきをかき分け簡易的に作られている狭い道路をある程度車で進み、その後車から降りて自分たちの足で街を歩いてみた。3 月中旬の大曲地区はまだまだ寒さが厳しく、海沿いで冷たい風が吹いていた。気持ちよく晴れた青空が広がる下、まるで街全体の呼吸が止まったかのように動いているものが何一つない。街には、私たちプロジェクト一行と、ボランティアで復興支援に来ていると思われる十数名の団体が一組いるだけで、他には誰もいなかった。正直、ここまで手つかずの状態だとは思っていなかった。大曲地区を訪れる前に教員たちから「大曲地区はだいぶがれきも片付いて綺麗になっているよ」と聞いていたので余計に驚き言葉を失った。そして、家があった場所に置いてある供養のお花に皆で静かに手を合わせ、今回の東日本大震災で犠牲になったすべての人々のご冥福を祈った。

自分の足で歩いていると、発見がたくさんあった。まず、真っ先に目に入っしたのは漁港から陸地へと乗り上げていまだに放置されている大型船舶である。巨大な船体が陸地へと乗り上げている姿に大きな衝撃を受け、津波の威力を感じた。もともとはこの場所にも堤防があったはずだが、津波で破壊されたのかなくなっていてすぐ近くまで海水がきていた。船舶のそばにはコンクリートのがれきが山積みになっていた。住宅街を歩くと、足元にはさまざまなものが散乱していた。テレビや新聞でしか被災状況を目にしていなかった今までは、それを単なる「がれき」としか思っていなかったが、よく見て確かめると家屋のタイルや木材、屋根の瓦、貝殻、

岩、割れた食器、時を止めたままの目覚まし時計、物干し竿、ボロボロになったぬいぐるみ、長靴、空き缶、ボートなどさまざまなものが集まって「がれき」となっていた。そこには大曲地区の街の人々の「生活」が確かにあり、ひとつひとつのものにはそれを使っていた人々の想いが詰まっているのだと思うと、それを「がれき」とひと括りにして呼ぶのは正しくない気がした。津波で流されずに建っている家はどの家も、1階はドア、窓、壁が無惨に破壊されて家具や電化製品が散乱し、2階の壁や屋根も剥がされ、今にも家全体が崩れ落ちてもおかしくない状態だった。中には家半分が丸ごと破壊されなくなっている家があった。よく見ると、その家の2階の部屋のドアにはかわいらしい名前が貼ってあり、そばには本棚やキャラクター柄の布団があったことから、その部屋が子ども部屋として使われていたことが分かった。そこで暮らしていた子どもとそのあたたかな家庭を想像すると、悲惨な現状に胸が痛んだ。

また、歩いていて気がついたことは、家屋や道路や自動車など、人間が作ったものは簡単に破壊されてしまったが、それとは対照的に、木々は津波の圧力で傾いてはいたものの、今でも元あった場所にしっかりと植わっているものが多いということである。そこに、自然の生命力の偉大さを感じた。人間はこれまで、森林を伐採したり海を開拓したりしながら自分たちの生活を豊かにしてきた。現在、私たちの食事や生活に使っているすべてのものは自然から得た資源で作られたものであり、私たちは便利さと快適さを求めて、自然を支配してきたのである。その中でいつの間にか、人間は自然の中で生まれ、自然の恵みに生かされているのだという生命の大原則を忘れてしまったのではないだろうか。普段の生活の中で、もしも地震や津波が起きたらどうするかを意識しながら暮らしている人はあまりいないだろう。しかし、私たちの生命は常に自然と隣り合わせである以上、万が一の災害を常日頃から意識し備えておくことは必要不可欠である。どうすれば国民全体がその災害意識を高めていくことができるのかを考えていくことも、津波の被害を目の当たりにした私たちの使命なのではないかと思う。

そして、それぞれの思いを抱きながら車に乗り、大曲地区を後にした。少し車を走らせると、完全に分断された橋が見えた。津波の爪痕が、生々しく残ったままであった。しかし川を越えると、被災した気配が全く感じられなかった。東松島市の中でも川を挟んで海側は津波に呑みこまれ甚大な被害が出たが、川を挟んで内陸側は津波の影響がなかったそうである。同じ都市の中でも被災したところとそうでないところがあるということは、今回足を運んでみて初めて知ったことである。今までどうしても「東北＝被災地」というイメージが強く、地域によってここまで状況が違うとは思っていなかった。ここまで状況が違うと、街の人々も復興に対する意識に差があるのではないだろうか。また、人々のニーズも地域によって違うため把握も難しく、必要な資源の提供も行き届きにくいのではないだろうか。災害支援の難しさのひとつは、災害被害を受けた大きさとその人が負った傷の深さはイコールではないというところだと私は考える。津波の被害を受けなかった人々も、被害を受けた人と同じように傷ついているのだ。そのような人々にも必要な支援が行き届くようにすることが重要で、その支援を把握する役目はSWが担っていかなければならないだろう。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
18	2012/3/14	視察	南三陸町	柴田城宜

大曲地区を後にした私達は、南三陸町に向かった。南三陸町は、大曲地区に比べ、ガレキ撤去が進んでいるように感じた。しかし、その近くにある公立志津川病院に足を運ぶと、最上階の部屋まで津波が襲った爪跡があった。病院の玄関部分には、多くの献花やお供えがされており、大切な人が震災により亡くなったという現実と今もなお手を合わせに来られる方の存在を感じた。私達は、防災対策庁舎にも足を運んだ。防災対策庁舎は、志津川病院と同様に、津波による被害を受けたことが一目瞭然だった。この庁舎は、日頃避難訓練を行う時に利用していたそうだが、実際には避難先として指定されていなかった。津波が到達するまで防災無線を流し続けた24歳の女性職員さんのことがメディアでも取り上げられている。建物の前面に、「防災対策庁舎」という看板が掲げられているが、この建物の状況と周辺地域の様子をからは、防災対策の機能が果たされていないと感じた。

南三陸町では、復興に向けて様々な取り組みが行われている。「南三陸さんさん商店街」がその一つである。この復興商店街は、海岸部から2、3キロ離れた所にオープンした。昨年の夏頃から、被災した商店街の人々が声を上げ、地元の大学などと協同し運営が始められたそうである。商店街の中には、商店街の名物となっているキラキラ丼という海鮮丼のお店やそば屋などの飲食店や電化製品店、精肉店や衣類の販売店、さらには整骨院など合計35店舗が営業されていた。商店街の雰囲気としては、町のお祭りのような明るい印象であった。派遣メンバー全員で分担して、キラキラ丼を提供しているお店に行ったが、一人ひとり今まで見たことが



ない透き通った海鮮丼に感動を覚えると同時に、食を通して復興に向けての兆しを味わうことができた。

志のやというお店のキラキラ丼をいただいた後、その店主の高橋さんにお話を伺うことができた。高橋さんは、南三陸町の飲食店組合の代表と南三陸復興ダコの会の代表も兼務されている方である。高橋さんのお話で

は、高橋さんの自宅は、海岸部から2、3キロ離れた場所に位置していたため、当時は津波が来ても床下浸水程度だと思っていたそうである。実際、津波が自宅の天井まで達し、家が流され、九死に一生を得たそうである。私は、自分の命が危ぶまれた当時のことをお話いただいたことに感謝すると共に、そういった被災者の想いを伝えていくことも私達の使命であると思った。

また、南三陸町役場の職員をしておられる阿部さんにもお話を伺うことができた。阿部さんは、高橋さんと一緒に町の雇用場の場づくりを中心に活動されている。公的な機関に属しておら

れる方にしては、商店街の人や地域の方との繋がりが大変強いことを感じた。阿部さんは、オクトパス（置くとパス）という、合格祈願や復興祈願をかけたタコの文鎮づくりにもご尽力されている。お話の最後に、時間があれば Yes 工房を見に来て下さい、とお誘いいただいた。そこで、私達は早速見学させていただくことにした。Yes 工房では、震災により家や仕事が無くなってしまった人に対して、明日への希望のために元気で働く場が必要との観点から、雇用の場が展開されていた。工房は、廃校になった小学校の特別教室を利用しており、一階部分では復興ダコ文鎮、二階部分では繭の雛人形づくりや縫い物などをして製品を作っている方がおられた。工房の方々は、私達が突然押しかけたにもかかわらず、製品の説明や和気あいあいと作業をされている様子を見せていただいた。

今回の南三陸町の視察では、さんさん商店街に飾ってあった大漁旗が一番印象に残っている。この旗は、石巻市の内陸部の小学校の企画で、小学生が漁師さんへの想いを込めて送ったものである。旗の中には、メッセージが書かれたものがあり、少し拝見した。

「おいしいお魚待ってるよ。」「元気で
すか。」「心配しています。」「またおい
しいお魚よろしくね。」などのメッセ



ージがあった。この言葉から、内陸部と沿岸部との繋がりを感じることができた。私自身は漁師の方々は縁の遠い存在だが、この地域の子供達にとっては認識の強いものであることに気づいた。東日本大震災により、宮城県の経済を潤おわせていたかつての海は、脅威をもたらす海へと変貌したが、近い将来、この地域に暮らす人々にとって再び財産を生み出す海へと帰っていくことだろう。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
19	2012/3/15	インタビュー	石巻市雄勝地域包括支援センター	師岡 彩音

関西福祉科学大学 B チームは石巻市雄勝地域包括支援センターの鈴木健太さんにインタビューを行った。雄勝地域は漁師町で、70代～80代の高齢者の方でも浜に出て漁師として仕事しているという特徴がある。雄勝地域の人口は約 4300 人の小さな町だが、震災後は約 3000 人の方が雄勝地域以外に避難して、現在は約 1000 人の方が雄勝地域で生活されている。インタビューをさせていただいた鈴木さんは、もともと特別養護老人ホームの相談員として勤務しており、震災を機に地域包括支援センターでソーシャルワーカーとして活動されるようになった。

震災後の 2、3 日は避難所もなく、道路が通行できないため雄勝地域は孤立し、船でしか往来ができなかった。被災直後は、ソーシャルワーカーであることは関係なく、身動きが取れないこともあり、自分も被災者として安否の確認や入居者の世話、水汲み、支援物資の確認など、目の前の避難してきた利用者さんのケアをしていた。雄勝地



域は山の上に避難した高齢者の方も多く、避難した高齢者の中には凍死してしまった方もおられた。

その後、3月の末からは避難所をまわり、避難所での生活が難しい要介護者に対して施設や病院への入所の手配をした。震災によってライフラインが途絶えてしまっているため、地域包括支援センターでの業務としては、住宅、仮設住宅からの相談が多かった。雄勝地域包括支援センターに合流してからは、ニーズ調査を行い生活のしづらさを聞いた。相談内容にはライフラインの相談が多く、水道水が最後まで断水状態だったので、移動が困難な高齢者のために水を汲みに行ったりもした。

義援金などの手続きをするのが大変だった。高齢者世帯や一人暮らし世帯の手続きの代行を行った。仮設住宅も出来始めると、設備関係の相談が多くなった。テレビの設定なども頼まれた。最近では、生活面の相談がいまだ多いが、経済面の相談も出てきた。

仮設住宅で暮らしている人と津波で流されずに自宅で暮らしている人との間に格差が出てきた。支援物資などは仮設住宅が優先で届くため「避難所が優遇されている」という意見も自宅の方から出た。また、住宅生活者には、情報が入ってこないという事態も起こった。Sさん

は情報を意識して渡すなどしていた。

全国から、さまざまなボランティアの方々が来たが、個人的に話を聞くことやマッサージなどのボランティアの方が一回訪問してそれきり来なくなるということがあり、中途半端に完結しないで帰ってしまうため、住民に訪問疲れが起こってしまった。また、仮設住宅が建った初期は、多重訪問も問題となった。宗教団体や政治団体なども来て、仮設住宅の方は訪問疲れをし、鈴木さんが訪問すると門前払いをされることもあった。



石巻市役所に仮設住宅を担当する部署が出来てからは、勝手に訪問できなくなった。逆に、助かったボランティアとしては、移動支援や傾聴ボランティアなどがあった。生活が落ち着いてきたら、心のケアや傾聴ボランティアを通して話をしたい人、区切りをつけたい人たちから、お茶を飲みながらの談話が求められるようになった。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
20	2012/3/15	インタビュー	渡波地域包括支援センター	泉 綾 子

石巻市渡波地域包括支援センターの高橋了氏からお話を伺った。

ソーシャルワーカーが活動する地域の被災状況

海岸から 1.4km 離れた、田畑と住宅に囲まれた地域に位置、デイサービスセンターに隣接しており、地震発生から 1 時間後、地を這う津波が 200 メートルほど先に見えたため、デイサービスセンター利用者と一緒に送迎車両、車椅子を用いて、山の方の高台へ向かって逃げた。石巻市渡波地域包括支援センターにはひざの高さほどの勢いの弱まった津波がきた。パソコンの水没により、ケース記録の一部は消失した。

石巻市渡波地域包括支援センターの管轄範囲は牡鹿半島までに及ぶ。特に牡鹿半島では石巻市中心部に比べてサービス提供事業所が少なく、元々公的な支援に格差があったという。

インタビューの内容（特にソーシャルワーカーが何をしたかに焦点をあてる）

①震災直後の様子

デイサービスセンター利用者ととともに指定避難所である被災を免れた集会所で避難生活を始め、避難所内で区長などと連携を取って地域外からきている利用者の生活の場を作った。利用者を家族へ引き渡してからは、地域包括支援センターの機能回復、デイサービスセンターの再開に向けて地域包括支援センター、デイサービス等のスタッフ総出で片付けにあたった。震災直後はただデイサービス利用者のケアに当たるのみで、社会福祉士としてできることはなかった。



②震災後初めてソーシャルワーカーとして活動したと感じたとき

避難所には医療など様々な専門職チームが入っていた。しかし、専門職チームは、被災者に対してその専門性に特化して支援を行うため、被災者の生活全般として捉える支援が少ない。混乱した被災者とその課題の整理をしながら各々の専門職チームとの連携がとれたことが、震災後に初めてソーシャルワークを実践したと感じた。

③社会福祉士としての取り組み

避難所で相談会を開いた。事前に避難所内にチラシを配布したものの相談に来たのは 2～3 名程度だったが、そこではニーズの把握をすることだけが目的ではなく、今後移り変わる生活環境とともに不安に感じることや課題が変化してくるため、事前に地域包括支援センターや社会福祉士という存在を知ってもらい、そこに相談ができる場所や人がいるということを伝えたかった。震災を通じて改めて社会福祉士や地域包括支援センターの認知度の低さを感じた。住民がどうしようもない状況に陥って、相談にきたときに初めてこれらの存在を知るような状態

だ。そのときでは手遅れである状態が多い。そのため、予防的な観点から地域包括支援センターや社会福祉士の周知をしてきた。

④震災後にできたつながりについて

日本社会福祉士会では「被災地地域包括支援センター社会福祉士の後方支援のためのボランティア」という方針であったため、社会福祉士派遣を要請した。全国からやってくる社会福祉士の所属は様々で、新人からベテランまでが入れ替わりボランティアに来ていた。震災がなければつながることはなかったが、現地での活動を終えても難しいケースの相談や各自治体、各事業所等の事業取り組みの情報交換がお互いにできるようになった。自分自身もまた、全国に災害等があったときには力になりたいと思っている。

また理学療法士会とのつながりができた。避難所生活によってADLの低下が見られる高齢者や被災により入院する高齢者が多くおり、リハビリテーションのニーズはあったものの、介護認定審査会開催が滞っている状況で必要なリハビリテーションを安易に利用できないこと、既存のサービス提供事業所にとって震災以前から提供困難地域があること等により、地域包括支援センターとしても理学療法士会としてもボランティア支援の必要性を感じていた。お互いのニーズが一致してともに活動することができたのは大きな成果だといえる。そして、仮設住宅では看護チームが活動していたことから震災前と比較して看護師職との連携が取りやすくなったという。

⑤災害発生時などの緊急時に、社会福祉士、ソーシャルワーカーとして活動していくために必要な後方支援

今回の日本社会福祉士会による後方支援のための社会福祉士の派遣は本当によかったと思う。コミュニティの崩壊と同時にキーパーソンを中心とした地域支援ネットワークも消滅した中で、避難所や仮設住宅、被災地域に居住する在宅者の膨大な件数の相談対応と早期ニーズ発見を、現地の社会福祉士等の支援者だけではこなすことができない。その中で独自に支援活動を展開するのではなく、震災前から関わりのあったケースや社会資源を把握している現地支援者を中心に側面支援を行うことで、対象者だけではなく、現地支援者も混乱を回避することができた。今回、被災地の専門職には、自身の経験を伝えたいという人が多い。今後、震災に関する情報の伝達や共有、活用をし続けていく必要があるが、個々人でできるものではない。各専門職から集約し、それらの役割を職能団体が担っていくことで受け継がれていくことができるし、支援にきた全国の社会福祉士が活動終了後に各担当地域や職場で活用できるものもあると思われる。これらのことから日本社会福祉士会という職能団体からの後方支援は重要で、適切であったと感じている。そして、行政の緊急時の対応体制を見直す必要がある。高齢者虐待のときに必要な措置や権利擁護に関することなどで行政にしかできない役割がある。そうした部署が義捐金等申請窓口になっては、緊急性の高いケースの住民の命や生活を守ることができない。行政のリーダーがこれらのことに理解を示した体制に変えることが必要だと思っている。しかし、被害が甚大で行政も被災し機能不全になったため今後の課題として行政の後方支援も整えてほしい。



所感

高橋さんのお話から感じたことは、やはり社会福祉士は一人の人の「まるごと」を見つめていく存在だということだ。医療や司法、看護や介護など様々な専門職はそれぞれの分野で活動をしている。病気になって介護が必要になった、認知症になったので通院が必要、財産管理をどうしようかなど、いくつもの専門分野を利用する必要がある。そのときに専門職をつないで自分自身の生活を再建していくことは非常に難しいと思う。このことから、社会福祉士と一緒に問題を整理しながら再建していくことは混乱している被災者にとって不安を軽減することにもつながると感じた。一方で社会福祉士が相談会や住宅訪問をしても社会福祉士とは何かかわからないことが多いということや、地域包括支援センターは介護に関する相談が多い現状から、知名度が低いことは確かだと感じた。

住民の人に、自宅近隣の地域包括支援センターや各部署で働いている社会福祉士の存在を知っていてほしいと思う。困ったときにどうしようもない状況になる前に、相談できる場所があることを知り、社会福祉士、社会福祉などがさらに身近なものになっていけば、何かを抱えているときや、何かがあったときにでも自立生活の再建につながれると思う。

また、このインタビュー前には日本社会福祉士会の方から社会福祉士の後方支援に関する説明を頂いていたので、日本社会福祉士会の派遣を受けて来た社会福祉士との活動についてお話を頂いたときに、後方支援とは何か、立体的に考えることもできた。被災地での派遣が終わってからも時には顔を合わせる関係が築かれたことは、今後のソーシャルワークの展開の幅が広がるのではないかと感じた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
21	2012/3/15	インタビュー	M病院・医療福祉相談室	柴田城宜

① Kさんのプロフィール

Kさんは、ソーシャルワーカーとして9年間活躍されている方である。2003年4月に病院の医療ソーシャルワーカーとして入職した。そこで、2008年3月までの5年間働いた。地域包括支援センターに移り、2008年4月から2011年7月までの約3年間社会福祉士として勤務された。2011年8月から現在に至るまで、Kさんは、宮城県のI市にあるM病院の医療福祉相談室で医療ソーシャルワーカーをされている。

② Kさんが活動する地域の現状

Kさんは、震災発生時から現在に至るまで、宮城県のI市で被災者支援に携わってこられた。

I市の現状は、2011年6月末の時点で避難所が閉鎖され、約300世帯が仮設住宅に入居されている。仮設住宅の周囲には、介護福祉課、社会福祉協議会、サポートセンター、M病院などの社会資源がある。I市は、被災した地域が人口の少ない地域であり、復旧や支援は比較的順調に進んだ。仮設住宅を例に挙げてみても、I市やW町などの被害が大きかった地域に比べ、建設が早かった。しかし、特別養護老人ホームや精神科及び内科の療養型病院の再開ができていないことが今後の課題である。

③ インタビューの内容と考察

＜ソーシャルワーカーとしての活動＞

・他職種との連携

Kさんは、病院の医療ソーシャルワーカーとして、病院内の医師や看護師など他の専門職との連携を行った。病院内で患者の避難誘導や安否確認をした時、被災状況の共有を図った。また、在宅療養で使用する酸素などの機材を手配する業者との連携も行われた。これは、仮設避難所の管理の際、薬や水などの物資の供給が円滑に進められることに役立てられた。さらに、介護福祉課の職員との連携では、空港に避難した特別養護老人ホームの利用者の救出と当法人での受け入れが行われた。同様に、自宅に帰宅できない利用者や患者のデイケアなどでの受け入れも行われた。これらは、平時からの他職種との連携が、今回の震災時においても役立てられたケースである。ソーシャルワーカーは、平時からどの専門職がどこに配置されていて、一体何を専門としているのか、人的資源を把握しておき、いざ被災者支援に携わる必要性が出てきたとき、これらをうまくコーディネートする機能が求められる。

・他機関の運営サポート

Kさんが被災者支援に携わるI市には、元々4つの地域包括支援センターがあった。しかし、その内の1つが壊滅的な被害を受けたことにより、従来の業務が滞っていた。この地域包括支援センターでは、保管していた個人情報が入っていたパソコンや記録が全て津波で流された。そのため、Kさんは外部と情報を共有し、情報を繋ぐパイプ役を果たした。ここでは、Kさんが以前に地域包括支援センターに勤めていた際の経験が活かされた。ソーシャルワーカーは、自分の所属先だけでなく、他の部署においても定期的に研修を行い、内部のことを理解しておく必要があるといえる。

Kさんは、その時、支援活動の一つとして、介護サービス事業者の被災状況の確認及び施設利用が必要な被災高齢者の把握にも取り組んだ。独居老人の世帯を一軒ずつ訪問すると、Kさんの顔を見て、お年寄りから「一人で余震に脅えていた緊迫した気持ちが和らいだ」と感謝されたそうである。安否確認という名目ではあるが、それと同時に心の支援ができたのではない。心の支援は、地域包括支援センターに配置されている、保健師や主任ケアマネジャーなどのソーシャルワーカー以外の他の専門職でも実践することができる。ソーシャルワーカーは、一人暮らしのお年寄りが感じる地震そのものに対する直接的な脅威は取り除くことはできないが、お年寄りが一人で心細く感じている環境を改善することはできる。お年寄りのご家族や友人と連絡を取ったり、近くの避難所の避難者状況を把握した上で、そのお年寄りと同じ年齢層の方と一緒に避難できる環境をコーディネートしたり、人とどのように繋ぐのがソーシャルワーカーの役割である。

- ・分け隔てなく被災者と向き合うこと

Kさんは、宮城県社会福祉士会の災害ボランティアで、法テラスの支援に社会福祉士として派遣された。その時、弁護士や行政書士といった一見お堅いイメージのある他の専門職と一緒に活動した。偶然であることは十分に分かっているが、他の専門職の方々が被災者の相談を受けている時に、自分の専門分野の話題には大きな反応を示すが、それ以外の話題だとあまり興味を示されていないように感じたそうである。このお話を伺って、とりわけソーシャルワーカーに限ったことではないが、ソーシャルワーカーだからこそ被災者を分け隔てすることなく、一人の人間として向き合う姿勢が大事だと感じた。

- ＜被災者支援に従事する上での課題＞

- ・現状の把握

震災直後は、大きな被災があった限定された地域しかメディアで取り上げられず、Kさんが被災者支援に従事していたI市の被害状況が分からなかった。Kさん自身、大きな地震があったと初めて実感したのは、津波にのまれていた患者さんが病院に来られた時であった。支援活動を行うために、十分な情報を得る手段がなかったことが課題である。また、震災時は他の職員と連絡を取る術がなかった。そのため、災害時には職員間の連絡をどのように行うのかを事前に決めておく必要がある。

震災時には、自分が所属する地域に関する被災状況を把握することは難しい。社会福祉士の職能団体である日本社会福祉士会は、全国47の都道府県にあり、35,000人を超える社会福祉士がすでに会員となっている。しかし、都道府県ごとに会員の所属が分かれており、その中で単体であれば連携が可能だが、幅広い連携を図ることは正直厳しい。そこで、社会福祉士会の運営は全国47の都道府県が続行しつつ、各市町村で分けられれば、平時と非常時に役立つ生きたネットワークを張り巡らせることは可能であり、団体を機能化させるためには必要な取り組みではないだろうか。

- ・平時からの他機関との連携

震災発生以前から、機能分化していたために病院と町役場や他の法人との普段の連携が薄くなっていた。そのため、今回の震災時にうまく連携がとれなかった。普段から取り組めていないことは、緊急時においても絶対にできない。実際、病院内が水不足で困っていた時、病院の方と市の職員が顔見知りであったため、直接頼んで分けてもらうことになった。顔見知りでな

かったことを想定すると、病院の水不足の問題は深刻になっていたことであろう。以上から、震災時においても活用できる平時からの生きたネットワークづくりが欠かせない。そのためには、何も用事がなければわざわざ相互に赴く必要はないが、業務の関係で普段から顔合わせをしておくことが重要である。

・被災者支援に従事する職員も被災者であるという事実

Kさんがインタビュー中におっしゃった、「震災以前は、震災は人ごとという認識があった。ところが、実家と地元が被災したという現実から初めて災害の脅威に気づき、被災者支援は自分の問題でもあるという認識が生まれ、自分も何かやらなければならないという気持ちになった。」という言葉から、現地で被災者支援に携わっておられる職員の方の中にも被災された方がいて、不安な気持ちを抱えたり強いストレスを感じながら活動に尽力されているのだと知った。今後、他者からの支援の手が離れていく一方で、被災者支援は被災した地域内にいる人々に任される体制に移行していくことが危惧される。本来の業務と並行して被災者支援に携わる支援従事者の負担は、今後ますます大きくなると考えられる。被災者が復興に向け直面することになる、新たな問題がその第一歩である。再建の見通しがない人々への支援として、再建への具体的な道筋がない中で、被災者の生活の基盤となる衣食住の確保が求められる。今後、国としては仮設住宅に入居されている人々を地域で自立生活が営めるように促す政策を推し進めようとしている。また、Kさんが所属している病院側としても、入院中の患者を退院にいなわなければならない。国と病院の方針を成し遂げるためには、地域での受け皿が必要である。しかしながら、現時点では、地域にそのような体制は整っていない。そうした現状を踏まえながらの支援は、より困難な道を迎える状況にある。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
22	2012/3/15	インタビュー	I 市社会福祉協議会	柴 田 城 宜

①A さんのプロフィール

A さんは、震災前は他県社会福祉協議会の職員だった。震災直後、I 市にボランティアとして支援に携わり、その後 I 市社会福祉協議会の職員として、I 市復興支援センタースマイルの運営に従事している。

②A さんが活動する地域の現状

A さんは、震災直後から現在に至るまで、宮城県の I で被災者支援に携わってこられた。

I 市の現状は、2011 年 6 月末の時点で避難所が閉鎖され、約 300 世帯が仮設住宅に入居されている。仮設住宅の周囲には、介護福祉課、社会福祉協議会、I 市里の杜サポートセンター、M 病院などの社会資源がある。仮設住宅に入居されている方々への支援に関しては、その全てを社会福祉協議会とサポートセンターが対応するような誤認識が市役所内にあるので、市と福祉団体が協同して行うという形ではなく丸投げされるケースがある。そのため、市役所における社会福祉協議会とサポートセンターの位置づけをある程度明確にし、各課への周知をはかっていく必要がある。

③インタビューの内容と考察

＜ソーシャルワーカーとしての活動＞

・専門性の限界を定めないこと

被災者支援においては、肩書きなど関係なく被災者の方々としっかり向き合っている。被災者側からすると、誰でもいいから話だけでも聴いてほしいという気持ちがある。ソーシャルワーカーは、そうした相談をテーマで区切ることなく受け付け、その相談内容から、必要であれば他の専門職に繋ぐ支援をすることができる。

・他機関や他職種との連携

I 市社会福祉協議会では、仮設住宅に入居されている方々だけでなく、みなし仮設や浸水地域で暮らしておられる方々を支援の対象としている。一方、サポートセンターでは、仮設住宅に入居されている方々に個別的な支援を行っている。両者間では、支援対象者の情報を共有することで連携を図っている。また、地域に密着した民生委員も欠かせない人材である。ソーシャルワーカーは、ただ自分が情報を持っていることに満足するのではなく、知らせる必要があると判断した情報を他機関や他職種と共有する役割を担う。

・ボランティアの調整

全国からのボランティアを調整している。ボランティアの中には、仮設住宅の入居者に対する支援だけがボランティアだと思い込んでいる人がいるため、そうした人々に対し、被災した事実は皆同じであり、みなし仮設や浸水地域におられる方々も支援の対象であることを知ってもらう。また、ボランティア調整の際、現地で「私は一体何をしたらいいのですか。」という言葉が口々に上がるが、個別に説明する手間を省くために、円滑に情報を伝達していくシステムを形成しておく必要がある。個々のボランティア活動にリーダー制度を設け、そのリーダーから、参加する他のメンバーに活動内容を伝えてもらう仕組みを構築すべきである。

- ・生の声を聴くこと

I 市復興支援センタースマイルでは、社会福祉協議会の職員として、仮設住宅に入居されている方々だけでなく、みなし仮設や浸水地域で暮らしておられる方々を支援の対象に、サロン活動を展開している。このサロン活動は、住民からのニーズを汲み取って始められるものだが、活動を通して、参加された被災者の生の声を伺う機会となっている。また、スマイルでは電話相談も支援事業の一つとして行われている。電話相談では、仮設住宅の入居者の中心となっているお年寄り以外にも、障がい者や子どもの情報も手に入れることができる。その電話相談で受け付ける内容の中には、社会福祉協議会を町の万屋（よろずや）だと勘違いしているものがある。ある住民の方から「小学生が夕方遅くまで遊んでいた、車に石をぶつけたりしているから注意して下さい」「スマイルかわら版の記事に載せて下さい」との依頼が寄せられた。しかし、A さんはその依頼を断った。それは、子どもの躰だからだ。この件は、地域住民が主体となって解決することであり、社会福祉協議会が率先して実行すべきことではない。社会福祉協議会は、地域住民主体の活動を支える黒子でしかない。地域住民の中にも勘違いしている人がいるが、社会福祉協議会が一からお膳立てして物事を推し進めるわけではない。あくまでも、地域住民の活動を後方支援する役目を果たすべきである。所属するソーシャルワーカーも同様で、自ら住民の前に立って何か支援を行うべきではない。仮設住宅が住みやすい場所になってはいけないということと同様に、自立する力を奪ってはいけない。だがその分、住民から、微かなニーズでも挙げればその声を聞き漏らすことなく、ニーズ充足に全力で努める姿勢を持ち続けなければならない。もちろん、自分から声を発することが苦手な住民に対しても、生の声を感じ取ることは大切である。

<被災者支援に従事する上での課題>

- ・将来への不安

いつまで被災者支援に従事できるのか、先が見えない。A さんが所属している I 市復興支援センタースマイルも再来年はどのように雇用されるのか分からない。被災された方々が生活再建に向けて見通しが立たないで悩んでいるのと同様に、被災者支援に携わっておられる方々も自分がいつまで支援に従事できるのか先が見えなくて不安に感じておられる方は多い。そのため、被災者はもちろんのこと、被災者支援に従事しておられる方々に対しても何らかの支援は必要である。私達は、今プロジェクトを通して、ソーシャルワーカーの方の想いを聴き取り、そこから被災者支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を見出したい。

- ・被災者の現状の把握

みなし仮設や浸水地域におられる方の情報が入ってこない。支援物資に限らず、情報面からしても、仮設住宅との格差は見受けられる。情報が入ってこないということは、情報はあるのに得る手段がないと解釈することができる。一人で生活を形成している人は存在しないのだから、必ずその人と接点を持つ人はいて、その人に関する情報を持っている人はいる。接点がある人とどのように連携を図るのがソーシャルワーカーの腕の見せ所である。

- ・子どもや障がい者などの社会的不利な立場にある人々への支援

現地には、子どもの遊ぶ場所がない。子ども達の親は日中、仕事を探したり、仮設住宅に代わる新たな生活拠点を探すために不在にしている。そのため、子ども達は孤立しやすい状況に

ある。これは、障がいのある人にしても同様に、地域住民の障がいのある人の障がいに対する理解が十分に得られていない現状がある。そのため、障がいのある人が孤立させられる状況に追いやられている。以上のことから、地域住民に対して、“子ども”“障がい者”として理解を得るのではなく、両者共に一人の人間であることを理解する場や機会を設ける支援の必要性を感じた。地域住民の中には、地域で暮らす子どもを放置しておいても何の問題もないと考える人がある。しかし、震災で傷ついた子どもを放置しておけば、自分の殻に閉じこもり、誰に対しても心を開くことができなくなってしまう恐れがある。また、障がいのある人を障がいのある人と分かったところで、それは何の意味も持たない。やはり、一人の人間として、その人が尊厳ある存在であるということを直接感じる事が大切である。そのためには、ソーシャルワーカーは既存の社会資源や必要であれば新たな社会資源を構築し、それらを繋ぎ合わせる機能を発揮することが求められる。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
23	2012/3/16	インタビュー	気仙沼市地域包括支援センター	原 佐知子

Bチームは気仙沼市地域包括支援センターの村上章子さんにインタビューを行った。気仙沼市の地域包括支援センターは市の直営で運営をされている。村上さんは病院・グループホーム・施設で介護などを経験し、気仙沼市地域包括支援センターのソーシャルワーカーになる。インタビュー後村上氏に教えていただいた気仙沼市の被災地を視察した。

震災直後、気仙沼市地域包括支援センターの事務所の1階まで津波が浸水した。村上さんは、1日目は待機し、事務所に避難してきた方々の対応をしていた。後日、住人の方が避難している場所にむけて職員が順番に様子確かめに向かった。地域包括支援センターの職員の安否確認を行い、市の職員として看護師や保健師と共に避難所に配置される。村上さんは気仙沼市民会館に配置されることになった。

震災の初期は、ソーシャルワークをするどころではなく、寒さ対策・ケガの消毒・具合の悪い方の搬送の手伝い・トイレの片付けなどの直接的な支援をしていた。また、地域包括支援センターの職員は避難所の運営も行っていた。村上さんは、避難所の全体を見て認知症の方に気づくことが出来た。また、自分に今は何の役割ができるのか考えることができた。これは村上さんが福祉の仕事をしていたから出来たことかもしれないと感じていることが分かった。

避難所生活が続く中で、避難所の方から精神障害者や認知症などの集団生活が難しい方を「どこかにやってくれ」という声があったため、対象者を1ヶ所に集めて対応していた。支援してくれる人が来てからは、夜に3交代で見守りを行い、睡眠時間が取れるようになる。地域包括支援センターの職員は避難所や市役所などに泊まりながら、家族の安否確認よりも避難してきた人の対応を優先して行っていた。しかし、職員だけでなく、避難所の方も眠れない日々が続いた。

避難所から仮設に移行していくなかで、仮設の方々からの相談は、環境そのものの相談や住宅改修の相談が多かった。仮設に移ってからは、周囲の人から「あのひとりで大丈夫かな、様子がおかしい」といった相談が来るようになった。相談が来た場合は、村上さんたちが訪問したり、社会福祉協議会でも見守り訪問を行った。人間関係で折り合いがつかない部分など、個人の居場所を作る手伝いが出来ていると最近になって感じられるようになった。ソーシャルワーカーとして被災した人と向き合えるようになったのは1年経ってからだった。

ケース記録については、パソコンのシステムのサーバーが津波によって壊れてしまい、データが全部消えてしまったという。村上さんの記憶で対応し、紙ベースの記録は読めるものを拾い、乾かししたりしていた。在宅介護支援センターの利用者は情報を照らし合わせて対応していた。

仮設住宅の住民の方と在宅で生活している人の間で支援の差があることが分かった。在宅で生活している人の情報の把握ができなため支援の手が届くのが遅かった。各県の保健師さんなどに在宅にローラーをかけてもらい、情報を集めてもらう。また病院などの情報を渡してもらうなどして対応をした。地域包括支援センターが通常の機能を果たせない状況だったのととても助かったそう。

また、村上さんは医療職チームや様々な団体とミーティングで支援の動きや情報を確認していた。気仙沼市単位ではなく地区ごとのミーティングが開かれている。そのミーティングで民生委員と連携があることが分かった。

村上さんのインタビューを行うなかで、様々な問題点に気づいた。仮設住宅への入居者は抽選で選ばれるため、知らない人の中に入り、孤立してしまう人がいることが分かった。孤立したままでなく、気仙沼市地域包括支援センターが行ったように見守り活動などで目が届く状態のようにすることが大切だと感じた。

訪問員の方自身も被災しているため、避難所生活をしながら避難所訪問を続けている。夜眠れないなど、辛いという声があることを知った。支援する側の人でも一人の被災者であることに焦点を当て、支援する人を支援するものや人があると前向きな気持ちで支援を行っていいのではないかと感じた。また、被災していない人が支援者として訪問活動を行い、避難所を回り、自分の住んでいる地域を言うと、表情が一変し、被災していないことを責められることがあるようだ。村上さん自身も被災していないことをいうと「被災していないのに何が分かるのか」と言われたことがあるとのことだった。これは、被災しなければわからない思いや辛さがあるのだと痛感した。しかし、逆の立場ならこのような言葉が出てしまうのも仕方ないことであるように感じた。



気仙沼市地域包括支援センターは市の直営で運営しているため、被災地外から支援に来た人たちから市の対応に対する苦情が多かったということを知った。支援をするために来て、大きな問題があれば指摘する。しかし、地域の住民だけではなく、地域包括支援センターや市そのものも通常

の働きが出来ない状況であることを知る必要があると感じた。また外部から見える問題と内部から見える問題は違っているのかもしれないと感じた。同じ説明や状況報告を繰り返すことのないように引継ぎを切れ目なく行っていくことや、地域の方と外部から支援に来ている人を調整する役割を担う人がいると、その地域の支援する人の負担を少しでも軽減することに繋がるのではないかと考えることが出来た。

村上さんが震災の状況下で心の支えだったのは、村上さんを気にかけて声をかけてくれる先輩や県の自治会などの団体など、長く関わってくれる人や何かあったら相談できる人の存在だった。何かあったとき頼れる存在や仲間がいることは、私たちの普段の生活のなかでも大きな力になると感じる。震災のような普通が奪われた状況になったときでは、そのような存在がよ

り大きな安心感につながるのではないかと考えた。

他の地域の方に伝えたいことを伺ったところ、どのくらいかかるか分からないが、見放さないで見守って欲しいということであった。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
24	2012/3/16	インタビュー	亶理町地域包括支援センター	畑 中 美 里

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分頃地震発生。亶理町では震度 6 弱を観測した。津波浸水面積は、約 35 m²で亶理町の約 48%であった。人的被害は、住民登録者の死者が 303 人。行方不明者は、1 年後のインタビュー時点で 2 人であった。行方不明者が少ないのは押し波のみの津波であったのが要因だ。住宅被害は、地震被害・津波被害併せて全壊で 2,533 棟であった。産業被害は、亶理町の一次産業である農業が津波により大ダメージを受けた。

震災当時、昼間であったため、小中学校に通う子どもたちは、そのまま小中学校で避難していた。小中学校は地域の避難所に指定されていたが、津波により浸水し孤立状態となった。その状況を打破するため翌日、亶理高校が避難所として解放された。亶理高校では、地震発生後初めて顔を合わすことになった親子が涙の再会を遂げた。支援物資の面では、おにぎり・菓子パンのみの食事が 1 週間続き、野菜や果物が不足していた。また粉ミルクは、足りていたのだが、アレルギー対応の粉ミルクがなく困ったそう。そして断水と停電が長く続いた。情報網の面では、震災当時情報は何も入ってこず、津波の映像は見ることなく、数日後の原発の問題もニュースで取り上げられてから 2 日程遅れて住民から聞くことになった。電気の復旧が遅かったため、固定電話も使えず携帯電話で情報を共有したり、いろいろな関係機関と連絡を取り合っていた。

インタビューをさせていただいた條さんは、震災直後、一晩中役場で給水活動をし、翌日避難所に指定されていなかった 亶理高校を避難所とし開放できるように準備をされた。設営は避難者の誘導、名簿の作成等を 3 人程で夜通し行ったそう。予想では 100 人程度の避難者が小中学校から亶理高校の避難所に来るとされていたが、蓋を開けてみると、400～600 人の被災者が避難してきた。指定されていない避難



所ということで緊急用の毛布や物資がなく、避難所管理のため 1 週間泊まり込みで業務に就かれた。また、他の役場の職員も指定避難所等、公の場の被災状況を確認しなければいけなかった。しかし、行ったもののそこで津波に巻き込まれてしまい電話も通じず所在不明の混乱状態が続いた。職員が配置されていて初めて有効的であるマニュアルは、今回の震災には全く活かされていなかったと言える。條さんの役割も震災時のマニュアルによると本来は、遺体安置であったそうだが、遺体安置は自衛隊・警察署が行い、手薄である避難所の設営や避難所回りが業務になった。物資配布のための職員の連携では、課ごとに仮のチーム編成を行い、役割を分担し、今では“仮設住宅支援チーム”等と決め連携がしやすいように動いているそう。

また、亶理町の仮設住宅の規模は小さくても 90 世帯、大きいところでは約 550 世帯の仮

設住宅が計5か所ある。南三陸や石巻に比べて早く仮設住宅を建てることができた理由は、仙台平野であったこと、いくつかの公共施設を新しく建て直すために更地を準備していた中での震災であったということの2点である。ただし、仮設住宅には地域ごとには入れず、抽選であったので、地域コミュニティは崩壊するという問題が生じた。コミュニティが崩壊すると、近隣住民の問題が増えてしまう。現在では、障がい者やその家族と近隣住民の問題が増えているそうだ。

高齢者にとっても地域コミュニティが崩壊することは、大問題である。亘理町の仮設住宅はあらゆる地域の方々の集まりなので、孤立してしまわないように生活支援相談員・保健師・ボランティア団体が家庭訪問や予防教室等を開いている。しかし、このような関わりが苦手な人もいる。そのような方には特に気を配って家庭訪問をしているそうだ。條さんは、週に1度家庭訪問が他の職種の方と被らないように調整をする機会を設けている。在宅に戻られた方への支援については、1度ニーズ調査が行われたのだが、それからは実施されておらず、支援も行き届いていないのが現状ではないかとのことだった。これからも生活再建に向けたニーズ調査が必要だと話しておられた。仮設内の子どもたちの様子については、精神的な問題が浮上している等の話は出てこなかったが、スペースが限られているなかで遊びの幅が狭まり、親たちからは、遊具を作ってほしいという要望が挙がってきている。しかし、現実には難しいそうだ。

避難所での活動については、初期の段階は本当に大変であったそうだ。1歩歩くと「布団が無くて寒い」、「薬がない。どうしたらいいか」、「向こうの方がうるさい。言ってきてくれ」等目の前の対応に追われ続け、睡眠も十分に出来なかったそうだ。條さん曰く、一生分の相談を受けたような状況であった。このような中で、“福祉的避難”の在り方の重要性が指摘された。福祉的避難とは、認知症や要介護などの特別な支援が必要な高齢者、障がい者に適した避難所を提供することである。ソーシャルワーカー（以下SWrとする）だから出来たこと…それは福祉的避難が必要な方を見つけ、またご家族からの相談を受け、福祉施設（福祉避難所）につなげられたこと…であると話しておられた。このような活動は、震災発生から1週間後に見られた。特にケアマネの方々が積極的に動いてくださり、個人個人で連絡を取り合って、尽力を注がれたそうだ。福祉施設につなげるという流れでは、ケアマネの方がアセスメントをし、行政（SWr）と入所判定会議を行い、適切な種別の福祉施設に連絡をし、高齢者等に緊急的に施設入所していただく、という流れになっている。福祉避難所でも、條さんは高齢者の方々へ支援制度の理解や利用の手続きのお手伝いをしていたそうだ。これもまた、SWrだから出来ることの業務の一つであると思う。

何かもっとうすれば良かったと思うことはあるか、という質問に対し、平時より災害時の相談職のポジションを明確にするべきであると答えていただいた。災害が起こると、福祉施設等で勤務しているSWr・ケアマネ（相談職）は、手薄になりがちな介護に回される場合が多い。しかし、SWrは広い立場に立って医療機関や福祉施設等に“つなげる”ために“仲介役”という職責を果たす必要があると話しておられた。

印象的であったのは、ボランティアの方との意識の違いである。ほんのごく一部のボランティアの方に、ボランティアで来られているにも関わらず、高齢者・障がい者の仮設風呂の介助を頼み、引き受けたものの実際行ってみると大変そうだったからなのか、これは行政のすることだと言われたり、電話で亘理町の現状だけ聞いて、何の支援やボランティアにも繋がらない

という困ったことがあったそうだ。ただでさえ人手が足りない震災時に、このような非協力的なボランティアの方がいたことには驚いた。

また、宮城県社会福祉士会の協力も大いに助かったそうだ。震災後すぐに電話があったが、條さんも何をしてもらったらいいいのか分からない状況であったため、状況が落ち着いてからの支援をしてもらうことになった。2、3週間後に高齢者の方の行政手続きや相談に手が足りていなかったため、宮城県社会福祉士会の方にボランティアを要請した。宮城県社会福祉士会は、ケアマネ協会と弁護士会とも連携しているため、何か出来ることがあれば連絡を待っているということと、情報提供の役目を担っていた。情報は現地の者では、なかなかつかみにくく、制度の変化も伝えてくれたので、バックに団体がいるという安心感が持てたそうだ。介護福祉士会の方たちも、福祉避難所で約1カ月泊まり込みで協力してくださったそうだ。

現状では、仮設住宅での障がい者関係の問題の増加に加え、狭い仮設住宅で家族といえども、ストレスが溜まり精神的にダメージを受けているということ、高齢者が仮設に取り残され家族である若者はアパートを借りて別居になる等の、世帯分離が進んでいる。また、認知症の方が増え、程度も進んでいるのではないかと危惧されていた。

業務の面では、初めての取り組みである仮設住宅の役割分担と従来のケアプランの作成の仕事等でまた、忙しい日々が続いているそうだ。

これからの震災に備えて、まだ明確なものはないが、“災害弱者”を出さないために色んな対応ができる体制作りをしていこうという方向性にはなっている。地域住民のコミュニティの再構築に向けた支援も必要となってくる。

生活の一部であった農業・漁業がまだ出来ない状態なので、地域の方々の“生きがい”という視点での支援は、まだまだ難しいであろうということだった。しかしその反面、漁港では市場もあり、仮設内にも商店街があり、復興に向けて亘理町が動き出している様子も見られた。

インタビューの最後に、條さんより他の地域の方々に対して、「いろいろなご支援ありがとうございました。復興に向けて頑張っていこうと思いますが、そのときはよろしくお願いします」とのメッセージをいただいた。



今回インタビューをさせていただいて、私がタイトルをつけるならば“災害時におけるSWrの役割”である。條さんがおっしゃっていたように、災害時に相談職はどのように専門性を発揮できるのか、発揮するためにはどのような取り組みが日頃から必要なのかを考えさせられる良い機会になった。人命救助の場面では医師や看護師という専門職が活躍し、生活支援の段階になれば、生活面での専門職

であるSWrなどの相談職が活躍するべきであろう。

平時での取り組みの大切さは、ネットワーク作りであると話されていた。種別関係なく個人的・組織的にいろいろな人と付き合っ

感じた。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
25	2012/3/16	インタビュー	名取西地域包括支援センター	西 畑 知 美

今日は、名取西地域包括センターの渡部匠さんにお話を伺った。渡部さんは、震災当日ソーシャルワーカーの活動としてより、個人的に、地震の後の対応として、周りの状況確認と避難誘導を行った。状況としては、長い地震だと思っていると電気が落ち、施設の上の階は戸棚が倒れ、床には亀裂が入っているという状態だった。その日は、30分から1時間で外部と連絡が取れたので一時帰宅した。自宅では水とガスが使えたとのこと。ガソリンはあったので、ラジオで情報収集をしながら、無事であってほしいと思いながら、独居高齢者の安否確認を行った。結果として問題はなかったが、震災直後、震度の大きさが震度5強から6弱もあったことは分からなかった。

翌日からは自転車で避難所を回った。近くの民生委員は仙台へ行っていたので、渡部さんは、公民館や市役所の名簿を確認し、回るが、ほとんどの方が見つからない。他の機関との連携が取れなかったので、情報のやり取りについては、市役所に、地域包括支援センターがどのように動いているかというメモだけ残し、それぞれで動いた。地震は、3月11日と4月7日にあり、11日は横揺れ、7日は縦揺れで、二回目の地震があったときは、もう駄目かな、と思ったそうだ。

ソーシャルワーカーの活動としては、避難所である公民館や小学校を回り、閉上から来た人の話を聞いたり、介護保険に繋がったり、又、保健師との情報交換や名取東包括支援センターへの引き継ぎを行った。例えば、避難所を回っているときに排泄を失敗した人がいたので、次の日施設に入所できるように手配したり、自立支援法を



使って保健師と連携して生活できる環境になるように支援したり、苦情の処理をするなどの業務が1ヶ月続いたそうだ。又、閉上では、流されてしまった特別養護老人ホーム等の利用者を、ベッド数も多いことから、名取西の施設の大部屋に入れることになった。閉上地区での生活では、出かける時も鍵も掛けない程、近所付き合いが親密あったが、仮設住宅に入ってからには外出しないようになった。そのため、名取東包括支援センターが担当し、介護の予防教室を開くなどして、積極的に参加するように声を掛けている。仮設数は6～7つで、入るには抽選になっているため、自分が希望したところへ行けるとは限らない。又、東北大学から来たチームが筋力・体力調査を行い、来ない人には声を掛けているが、アプローチが難しいとのこと。こ

の仮設は自立促進のために滞在期間が2年となっているが、まだ見通しが立たない。仮設住宅で暮らす人も、行事が似たり寄ったりで興味を示さなくなっているし、物資もあって当たり前という雰囲気が変わっていったらいい。この物資は、名取東では、仮設住宅はもらえるが、自宅で生活している人はもらえない。自宅で暮らす人には情報もなく、仮設住宅で暮らしたいと望んでも入れない。納得いかないと言われるが、どのようにしていくと良いのか模索されている状態で、情報発信の必要性和生命のリスクの大きさについて、行政によっても考え方が違うので、難しいとのことであった。

ソーシャルワーカーとして、震災時の取り組みとしてやっていて良かったなと思うことは何ですかと聞いた際、デイサービスで東松島・閑上・南相馬・陸前高田から避難している人20名と話をし、涙ぐみながら「来てくれてありがとう」と言われたときはやって良かったなと思ったと話されていた。

心のケアとしての接し方は、寄り添っていく姿であり、「助かって良かった」や、「頑張りましょう」は言わない方が良いとのことだった。大切にしていることは、この人にこのケアをすれば良いということではなく、人それぞれである、ということ。又、何か困っている人に対しては協力したいが、地域包括支援センターだけでしようとしても無理なので、行政との密な連携や、社会福祉協議会、保健センターとも関わる。その他にも警察や消防署、民生委員との、日々の関わりが生きてくる、とのことだった。

障害者関係では、65歳以下の男性が避難所で暮らしており、本人は自宅に戻りたいと言った。しかし、「避難所で知り合った女性の方と一緒に暮らす」と言い、家族も同意出来ないし、女性はすぐにいなくなった。結果、一人で自宅に戻ることで、ヘルパーが入ってサポートしている。

平時にやっていて良かったことは何ですか、という質問に対しては、何ができたかは分からないが、普段やっていることの積み重ねだと仰っていた。今回の震災では、PCで利用者の住所の一覧をリストにしていたので、それを紙ベースにして訪問することができたとのことだった。

そして、これからの課題としては、災害時のマニュアルを作っておくこと。車の燃料タンクのガソリンが半分に減ったら補充しておき、いつでもすぐに動けるようにしておくこと。さらに、精神的・心のケアが必要になってきた。生命が第一だったが、今とこれからの生活を考えていくことも必要になった。また、“復興”や“絆”という言葉がたくさん使われ始め、この言葉は本来の意味以外で使われることも増えた。被災者のなかには、この言葉に拒否的な感情を抱く人もでてきた。最初は、震災で何もなくなった町や生活に少しでも近付くよう、みんなを力合わせて前に進もうという気持ちで使われ始めた言葉だった。この最初の気持ちを忘れ去られないよう、これからも発信し続けたい。そして、介護保険は要介護度が1・2の人が35%から45%に今後伸びていく可能性がある、介護にならない取り組みをしていく。例えば、認知症についての寸劇をすることで、距離が縮まり、きっかけ作りになること等を話して



頂いた。

今日のインタビューで学んだことは、他機関との連携が大切だということと、災害などに日々備えを準備し、災害マニュアル等があれば便利だということだった。ソーシャルワーカーとして出来ることは、他の専門機関よりも目立たないが、人に寄り添うのは、どの機関よりも近く、安心できるものだと感じた。寄り添う目線や姿勢は、一番その人に合った支援や援助を考えられるし、そのような心のケアができるソーシャルワーカーの存在は大きいと感じた。

また今回の震災で、日々の業務に必要なことや、これからの課題が明確化されたことにより、よりソーシャルワーカーの役割が広がるのではないかと感じた。そして、その機能や役割について一人でも多くの人に伝えていきたいと思った。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
26-①	2012/3/17	その他	グループ討議A	柴田城宜

10:00 から東北自治体総合研修センターの一室にて、今回の一週間に及ぶフィールドワークの総まとめとして、参加者全員でグループ討議が行われた。グループ討議の参加者は、関西福祉科学大学の派遣チーム8名と同大学教員2名、さらに同大学事務職員1名、文京学院大学の派遣チーム4名と同大学教員1名の合計16名であった。

グループ討議の形式は、全員の顔が一人ひとり見えるように配置した会議方式での対面式で行った。グループ討議では、今回のフィールドワークで何をどのように感じたのかを、参加した学生と教職員が一人ずつ感想を自分の口で伝えることで共有した。今回は、私が特に印象に残った意見を紹介したい。

<学生>

関西福祉科学大学の派遣メンバーの内の一人が、二日間あるインタビューの前の日から体調が優れず、インタビュー初日は研修センターで待機していた。その学生が、自分の番がまわってきた時に言った言葉が私には強く印象に残っている。

その言葉は、「今回のフィールドワーク中に体調を崩してしまい、多くの方にご心配とご迷惑をおかけしました。私自身、宮城県に来てまさか自分が体調を崩すとは思ってもいませんでした。これは自分でも予想外なことで、被災された方々もまさか自分が被災するなんて考えてもいなかったと思います。今回のことを震災に置き換えてみても、同じことがいえることに気がつきました。」というものだった。

今でも鮮明に覚えているが、この学生が研修センターで待機していたインタビュー一日目の夕食の時、インタビューを終えて帰ってきた同じチームのメンバーに向かって、「ごめんなさい。」とひたすら謝っていた光景を忘れることができない。今回のフィールドワークの大切な取り組みの一つであるインタビューに参加できずに、どうして自分がこんな目に、と感じながら部屋で待機していたと思う。悔しい気持ちを必死に胸の内に押し込めて、自分の境遇を被災者の立場に置き換えた発言は重みがあり、この学生にしか言えない想いのこもった言葉だと感じた。

他にも、「復興商店街で商店主の方や関係者の方々の笑顔を見るまでは、震災に関しては、マイナス部分しかないと思っていた。確かに、マイナス部分は多いが、いかにして限りあるプラス部分を広げていくかが復興支援には欠かせないのだと気づいた。」や「今までは、震災に関してどこか人ごとのように感じていた部分があった。しかし、今回のフィールドワークを通して、現地で被災者支援に携わっておられるソーシャルワーカーの方の勇姿を見て、今できることは、ソーシャルワーカーの想いを伝えることだと使命感が出てきた。」など、一人ひとりの意見からは、一週間体験したどの出来事も印象が強くまとめきれないことが見受けられたが、フィールドワークを通して、今プロジェクトに対する個々の意気込みがより一層高められたように感じた。

震災に関するお話の中で、「想定外」という言葉をよく耳にする。「想定外」という言葉を聞

いて、震災に関する過去の記録をきちんと把握しておけば、想定内にできるのではないかとの考えもある。確かに、地震そのものの記録、地震発生の場所や時間、規模などを観測する地震観測記録やその地震によってどのような被害があったかの歴史記録は、実際様々な記録が専門家によって残されている。しかし、その記録の中に、人が地震に対して、どのように活動したのかという記録は残されていない。実際、1995年に起こった阪神・淡路大震災の時は、多くのソーシャルワーカーが自らの知識や技術を活用して被災された方々に向き合っていた。しかし、残念ながらそのようなソーシャルワーカーの活動が記録されていない。

また、被災者の支援に関して、「こころのケア」という言葉がキーワードとしてよく取り上げられる。もちろん、「こころのケア」も大切な被災者支援の一つだが、被災された方が自分の生活を建てなおしたり普段の暮らしを取り戻すためには、ソーシャルワークも必要不可欠である。そこで、大きな災害が起こった時に、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に携わったソーシャルワーカーの方から、将来、社会福祉士や精神保健福祉士を目指す私たち学生が、インタビュー調査という形で聴き取り、ソーシャルワーカーの方がどのような気持ちで支援に従事されていたのかという“想い”も含めて記録として残すことを学生だからこそできることをメンバー全員で考え、現地の方々に敬意を払いつつ、プロジェクトを進めていきたい。

<教職員>

関西福祉科学大学の先生方から、「フィールドワークのスケジュールを見た時、現地に一週間も滞在するのに直接支援を何もしなくていいのかという戸惑いがありました。でも、二時間に及ぶインタビュー調査の中で、学生の実心な気持ちでインタビューに取り組む姿勢から、これまで被災者支援に携わってこられたソーシャルワーカーの方の



想いを伺うことも支援の一つであることを学生から教わることができました。」という意見が出た。

派遣メンバー一同、現地に行くまでは、自分達が行くことで何か支援に繋がるのか、という不安な想いがあった。実際、私達が現地に行くことにより、現地の方々に歓迎されないと覚悟していた部分もある。私自身、初めて今プロジェクトの存在を知った時、関西の、とりわけ学生が東北に行ったところで何かできることはあるのか疑問だった。アルバイトをして、その給料を復興の資金に充てた方が、東北に行くよりも役立つのではないのか、と考えたこともあった。だから、この言葉を聞いて、私たち学生が東北に来た意味があったのだと安心した。

今思えば、現地で被災者支援に携わっておられるソーシャルワーカーの方の中に、「私は、支援活動を何一つできませんでした。」と複雑な心境を口にされた方がいた。この言葉は、本当に何も行動できなかったという意味ではなく、自分が満足にできなかったことの方が多かった

め、できたことがあったとしても全体的にできなかったと評価しておられることが分かる。現地のソーシャルワーカーの方も、被災者支援における具体的な道筋がないため、被災者を目の当たりにし悔しさやもどかしさを感じておられるのだと気がついた。ソーシャルワーカーの“声”プロジェクトを通して、そういったソーシャルワーカーの方がどのような気持ちで被災者支援に携わっておられたのかという想いを伝えていくことが使命であることを強く実感した。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
26-②	2012/3/17	その他	グループ討議B	泉 綾 子

参加学生・教員で、このフィールドワークを通して何を感じたか共有をした。

＜関西福祉科学大学 学生＞

- ・被災地の様子はテレビで見ているものとは違った。被災地に来て被災地の様子をイメージすることができるようになったと感じている。
- ・インタビューをしてみてその難しさを感じた。チームのみんなとインタビューを行う中で、一インタビューも支援も、一人では何もできないと感じた。
- ・自分もこの期間中にまさかインフルエンザになるなんて思ってもみなかったように、被災地の人もまさか震災が起こるなんて思ってもいなかったのだと思う。備えが必要だと思う。
- ・M ソーシャルワーカーに、「ソーシャルワーカーとしてできたことは何か」と聞くと、「分からない」という答えだった。今後もこのことについて考え続ける必要があると思った。
- ・気仙沼でも場所によって津波の被害の有無があった。また直接被災はしていない被災地で働くソーシャルワーカーがいた。「震災」というくくりで見ていたけれどその中にも違いはあった。外からでは全く分からないので、自分の目で確かめに来ることが必要だと思う。そして伝えていくことが大切、一人でも多くの人に来てもらいたいと思った。
- ・この人数での活動に慣れることができるか不安だったが、2日目にはメンバーとも話せたり、先生のバックアップが不安を解消してくれた。
- ・実際に被災地に来てみて、関西でも大きい震災が来ると言われているのに何も自分自身していないので、備えたいと思った。
- ・授業で聞いていた「地域性」を目で見て、自分も地域で働きたいと思った。
- ・インタビューを通じて、ソーシャルワーカーの仕事は見えにくいことに気づいた。だから広めていきたいと思った。
- ・充実した1週間だった。胸が締め付けられるような思いもした。先生やみんなが作ってくれた環境でできてよかった。
- ・障がい者の声などが反映されていない部分についても勉強したいと思う。
- ・実際に被災地に来て、「自分の目で見てください」と社会福祉士の方から言われ、自分の目で被災地を見て、今自分に何ができるのかとリアルに考えられた。
- ・ソーシャルワーカーの話から、震災直後は何もできず、人とのつながりが大切だということを学んだ。
- ・従来のつながりから得られる情報の大切さに気づいた。
- ・震災があったあと、まずは何をしようと考えたとき募金活動というのも思いつく。しかしそれらは限りのあることで、傾聴ボランティアや子どもたちの遊び相手に加えて、人と人が話したり、ソーシャルワーカーは精神面でも支えられる存在だと気づいた。
- ・仮設住宅を見せて頂いた。大規模仮設住宅が求められているように思えたが、小規模仮設住宅における隣人関係の話を聞いて、小規模仮設住宅のメリットに気付いた。
- ・学生のメンバーは男子学生が2名だけなので、男子学生の数を増やしたいと思う。

・移動中の車内から外を見ていて、平日にもかかわらずパチンコ屋に人が大勢いたり、大きな家の横に仮設住宅が並ぶ様子を見た。そこに住んでいる人たちは何をどう思っているのか気になった。

・ソーシャルワーカーとしての目、一人の人としての目を持ち視察をした。無力感、怒り、悲しみを感じた。やり場のない怒りが原発や公務員叩きにつながっているのかなあと思った。

・インタビュー中、レコーダーを切ること、匿名にしてほしいとのことなど臨機応変に対応することが求められたが、仲間がいたので乗り切れた。

・仮設住宅にも広さや設備面などのグレードがあることを知った。

・「震災」とひとくくりにしていただければ名取や他の地域を比べても行われている支援が異なっていた。

・ソーシャルワーカーはカッコいい仕事だと思う。自分がソーシャルワーカーになりたいと思う理由があった。

・このプロジェクトはまだ始まったばかり。今後も後輩たちとやっていきたいと思う。

・被災地に入る前から、報道を見ないようにしてきた。偏りのある情報を信用しきれなかったからだ。

・現地の視察では呆然として言葉も出てこず、どんな人が生活していたのかをイメージして胸が苦しかった。

・インタビュー中にソーシャルワーカーの表情を伺っていると、一瞬苦しそうな様子を感じた。お話を伺わせて頂いても大丈夫なのかと思った。

・病院の相談室の方から話を伺うと、堅いイメージのある弁護士は自分の知識内で共感、ソーシャルワーカーは専門性を超えて、人の目線で話を聴くという特徴があると思った。

・震災直後は命を守ることが求められると知った。これからはどうなのだろうか。

・社会福祉協議会の人からお話を伺うと、「ありがとう」というのも苦しいと聞いて複雑なんだなあと思った。

<文京学院大学学生>

・現地の人は震災によって変わったということを知った。震災で失ったばかりではなくいい面の勉強にもなったんだと思う。

・鈴木先生の話の中で、メディアの取材を嫌がっているのに学生のインタビューに応じてくれたのは、真実を伝えたいと思われているからだと思う。だから伝える使命感を感じた。

・日ごろから災害への意識を持つことが大切だと改めて思った。

・かわいそうという気持ちだけではどうしようもないと思った。

・被災者が仮設住宅での生活を始められても、新たな不満が出てくるとも知った。しかし支援者は我慢を促すなど、「その人たちの自立のために何をしたらいいのか」と考えないといけないと思った。

・インタビューは初めてで、自分のことでいっぱいであった。ソーシャルワーカーの内面も聞きたいが、難しかった。

・2校でプロジェクトを行うと、意見交換などでも考えの違いもあり、よかったと思う。

・インタビューでは隙間が空き、スムーズにいかなかった。質問を考えておくことが必要だと

思った。

- ・津波の被害などのマイナスな面しか見ていなかったけれど、津波によってつながりが強化されるなど、プラスな面があることを知った。自分の目で見て、聞くことが一番いいと思った。

- ・最初は何ができるか不安だった。被災地での活動前に、事前に備えた知識がなかったので、今学べることを目指して被災地で活動をしてきた。

- ・実際に現地を歩いて、目で見るというより五感でみるようにした。津波が来たとき、津波が過ぎ去った後、震災後しばらく経過した今までの被災地の様子を連続してイメージできず、何があってこのような現状になったのか想像がつかない。

- ・今できることは伝えること。将来できることは何もなく、今考えるべきではないと感じた。

- ・インタビューは反省点ばかり。聴くことしかできず、もっと食いついていきたかった。

- ・ソーシャルワークって何かと考えたとき、ソーシャルワーカーはクライアントの人生、クライアントの後ろを追いかけるというイメージだった。しかし実際ソーシャルワーカーの話を聴いて、ソーシャルワーカーは寄り添って共に歩くものだと思えたことが大きかった。

- ・インタビューの練習は必要だ。前日に練習を何度もしたし、チーム全体でやることの意味、みんなでやると支え合うことができ、思ったことを言い合える。このインタビューは自分たちの成長につながった。

- ・津波から一年、VTRを見ても、「またか」と意識が薄れていた。多くの人に伝えて、次につなげたい。

- ・ソーシャルワーカー自身が被災した悲しみを抑えて被災者を支援していることを知った。

- ・「平時からのかわり」というのがキーワードだったと思う。これは重要なことだろう。

<文京学院大学教員>

- ・テレビでは見えにくいのがれき一つ一つを見ると、その人の生を思い、視察した学生も苦しかったと思う。

- ・食堂の人が震災後のことを話してくれた。「震災後日本は終わったと思ったが、大阪のUSJや九州に旅行へ行くと、そこには活気があった。それを見て日本のごく一部での出来事だったんだと実感し、すごく元気になれた」という話が印象に残っている。

- ・インタビュー一人目はソーシャルワーカーとして何をしましたかという質問に、上司から指示がないと動けないと答えて下さった。位置によってソーシャルワーカーとして働けるかは変わる。そして、二人目は、ソーシャルワークはまあできればいいかなという程度。全く逆だけれど、どちらも真実。このように全く逆のことが混然としていた。

<関西福祉科学大学教員>

- ・チーム、グループとして変化していくには時間がかかるのに、比較的時間をかけずにグループへなっていたと思う。

- ・被災地の大学は被災者の生活をサポートしている。それにもかかわらず、私たちは一週間直接支援を行わずに被災地で調査をするなんておかしいのではないかとこのプロジェクトへの参加をためらい、葛藤を持っていた。しかし学生らのインタビューの様子を見て、これでいいんだと思った。

- ・あるソーシャルワーカーは被災地で活動しているが、自身は被災していない。そのためそのソーシャルワーカーは、「被災していない自分が頑張らなければいけない」という苦しみを持ち続けながら一年間支援をしてきた。今、その時のおもいを聞くことはソーシャルワーカーへの支援なんだと思った。大学の先生がインタビューをしたいと申し出ても、何かの調査に使うんでしょというように反応が返ってくる。しかし学生が訪れるとそのような思いを吐露することができ、これで一つの実りだと言える。
- ・報道では一人ひとりの生活は流されない。事実を伝えることで「何ができるか」と考えるきっかけにつながると思う。
- ・私は阪神淡路大震災のとき大学生だった。当時ボランティア活動をしていたが、そのころのことを思い出すので、できれば参加したくなかった。しかし自分を福祉の道へ導いた原点を見つめなおす機会になるかも、と参加を決めた。
- ・学生の多くは、疑問に感じたことを素直に口に出していた。
- ・受けたショックをそこにいない人たちの身になって考え、ソーシャルワーカーへのインタビューでは自分なりに整理して挑んでくれた。
- ・インタビューの依頼を受けて下さった社会福祉士の方は、「宮城県社会福祉士会の依頼だけど、いったい何のインタビューなのか」と警戒していたように思う。しかし、「被災地のソーシャルワーカーの話を聴きたい」という学生の思いが、ソーシャルワーカーに言葉を返させてくれたのかなと思う。学生の真摯な姿に感動した。
- ・学生がインタビューで、「ソーシャルワーカーさんは被災直後からどのような活動をされてきたのですか」と聞くと、ソーシャルワーカーさんは「分からない、難しいね」と言い、考えながら答えてくれた。また逆に学生が質問をされることもあった。インタビューを通じて、ソーシャルワーカーさんも自分の支援活動などを思い起して整理されていたように思う。
- ・文京学院大学の学生と過ごした。「車でいきたいところまで送りますよ」というと、「自分たちの足で歩いてみて回りたい」と言うので、被災地を一緒に歩いた。その気持ちに感心した。
- ・学生たちが問題意識を洗練していくところに感心した。
- ・学生たちは、いい緊張感を持って壁にぶちあたっていたように思う。
- ・学生たちは受け身・お客さんではなかった。
- ・ぜひ今後もこのプロジェクトを続けたい。事務局としてもできる限りの支援をしたいと思う。

所感

グループ討議では、それぞれが興味・関心を持っている分野の観点から幅広い意見があがっていた。そしてお互いが思いもしなかった観点到に気付かされた。このグループ討論を通し、さらに興味関心が広げることができたように思う。同時に学生、教員ともに感じたことをありのままに語ることができ、またそれを聴くことができるので、これまでの気づきを整理し深める準備につながった。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
27		その他	教員総括A	成 清 敦 子

復興支援プロジェクト
ーパイロット事業を通してー

今回、宮城県において行われたフィールドワークは、「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」のパイロット事業にあたる。先に述べられた通り、「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」は、福祉系大学経営者協議会の復興支援委員会（委員長校：関西福祉科学大学）により立ち上げられたものであり、これまで十分に活かされてこなかったソーシャルワーカーの災害支援における体験や知見を整理することを目的として、学生・教員で構成されるチームが被災地を訪問し、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うものである。そこで集約された情報を学生自ら発信する「学生“語り部”プロジェクト」を含めて、2つのプロジェクトの本格的な実施が予定されている。

2012年2月、このパイロット事業の実施に向けて、本学社会福祉学科の学生と教員を中心にプロジェクトチームが編成され、具体的な取り組みがスタートした。まず、事前学習として、「東北大震災と被害状況」（訪問先である宮城県を中心とした震災被害の実態についての理解）、「被災者支援の基本」（被災者支援において必要な知識、配慮すべきことの整理）、「インタビューの方法①」（ソーシャルワーカーへのインタビューの仕方、記録の取り方、逐語録の作成方法などの理解）、「インタビューの方法②」（阪神淡路大震災記念人と防災未来センターにおける Tell-Net フォーラム“災害の記憶・記録の保存と語り継ぎ”への参加、展示資料や映像による体験学習、阪神・淡路大震災で活動経験のあるソーシャルワーカーを対象としたインタビュー）、「ソーシャルワーカーの業務」（調査対象となるソーシャルワーカーが所属する機関およびその業務に関する理解）をテーマとした学習会を計5回開催した。そのうえで、3月12日～17日、本学教員（3名）と学生（8名）、文京学院大学教員（2名）と学生（4名）が宮城県でパイロット事業を実施した。東北福祉大学ボランティア会の活動状況、宮城県サポートセンター、日本社会福祉士会の取り組みについて講義を受けた後、現地での視察を行い、宮城県社会福祉士会のご協力を得て、被災地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行った。

今回のパイロット事業を通して、学生達は、被災した地域を歩き、その状況を肌身で感じることができた。津波による甚大な被害を目の当たりにし、「圧倒的な無力感に打ちのめされた」との感想が聞かれた。被災された方々や、復興に取り組んでこられた方々の体験談に耳を傾けながら、日常の暮らしが一瞬にして奪われるとはどういうことか、そのような状況にある方々はどのような支援を必要とされるのかを深く考える様子もうかがえた。

また、ソーシャルワーカーへのインタビューでは、これまで展開されてきた多岐にわたる活動が明らかになった。被災直後は、地域全体が大きな被害を受け、時には自らも被災しながら支援に向かったソーシャルワーカーもあった。支援に必要な情報や物資が十分でない中で、摸索しながら支援活動が進められたこと、その取り組みは平時の延長でもあり、地域の人々やさまざまな機関、施設とのつながりこそが非常時に活かされるとの声が多くあった。

加えて、今回のインタビューは、現役のソーシャルワーカーとそれを目指す学生との貴重な交流の場にもなった。学生達は緊張しながらも、ワーカーの思いや感情にも配慮しながら、真摯な姿勢でインタビューに臨んだ。そのような学生に応えるかたちで、ソーシャルワーカーも質問の一つ一つに対して誠意を持って、丁寧に答えてくださった。現地で活躍するソーシャルワーカーの言葉から、ソーシャルワーカーの卵として、自らの目指す道を確認することができた学生もあった。インタビューが、学生にとって貴重な学びとなったことはいまでもいが、ソーシャルワーカーの方々にとっても、震災以降の取り組みをふり返り、あらためて確認する機会として意義あるものであったのではないかと感じている。実際、学生からの「災害時のソーシャルワーカーの役割をどのように考えられますか」という問いに対して、ソーシャルワーカーが「皆さんはどう考えますか」と学生に対して問われ、現地での学びをふまえて学生達が述べた言葉にうなずきながら、これまでの取り組みを確認されるような場面があった。

震災から1年。被災地では、特に高齢者、障害者、児童など、「災害弱者」の立場に追い込まれやすい方々を中心として、生活再建に向けた幅広い支援が必要となっている。日常的な関わりを通して、当事者に寄り添い、その人らしい暮らしを実現していくソーシャルワーカーの専門性は、災害弱者をはじめとする被災者の方々への支援、とりわけ生活再建においても重要な意味を持っている。今後も、プロジェクトチームの学生達とともに、被災者（被災地）の「日常を取り戻す」ための支援において、ソーシャルワーカーがいかに重要な役割を担っているのか、被災地でのさらなるインタビュー調査を通して追究するとともに、現地での学びを学内外に発信すべく、「学生“語り部”プロジェクト」への取り組みも進めていく予定である。

最後になったが、ご多忙中、今回のパイロット事業にご理解とご支援をいただいたすべての関係者の皆様に心より感謝の意を表したい。

番号	年月日	分類	プログラム名	記録
28		その他	教員総括B	野村恭代

1. インタビューから見てきたもの

インタビューを実施したソーシャルワーカーの発言には、「震災発生～3、4ヶ月目まではソーシャルワーカーの役割や機能を意識して活動していなかった」という共通項が確認された。しかし、それはソーシャルワーカーに限ったことではなく、被災直後は様々な専門職者が無力感に苛まれ、その一方で、専門性の壁を越えて支援を行う時期であったものと考えられる。また、あるソーシャルワーカーは、被災直後の自身の経験に基づき「自分たちは何もできなかった。ソーシャルワーカーにできることはない」と発言をしているが、さまざまな職種やボランティアなど、全体をまとめる役割および事態を鳥瞰的に捉えながら活動していたということは事実であり、それらの役割を意識することができないままにソーシャルワーカーは専門職としての役割を担っていたのである。意識せずにそのような活動が可能であったのは、ひとえにソーシャルワーカーが「専門職」であるからであり、その専門性を被災現場にありながら発揮して来たことによる。

さらに、震災後4ヶ月目頃より、ソーシャルワーカーは、被災者の「生活」に焦点をあて被災者の「生活の場」（自宅や避難場所、仮設住宅など）を訪問することにより支援の必要性の有無を確認するなど、積極的に専門性を活かした被災者支援を行っている実態が明らかになった。誰も気がつかなかった被災者の些細な変化に真っ先に気づき、声をかけ、被災者の想いに耳を傾け、その想いを受け止めながら支援を行っていたのはソーシャルワーカーである。

被災から1年経った現在、そしてこれから、さらにソーシャルワーカーの役割がさらに重要になる時期であろう。

2. 本事業における学生の変化

現地入りまでの約1ヶ月間の事前学習を行うなかで、漠然と抱いていた被災地のイメージ及び日常的なソーシャルワーカーの業務、災害時のソーシャルワーカーの役割が学生たちのなかに形作られていた。しかし、依然としてそれは明確なものではなく、現地に行くことも他人事として捉えている様子であった。

事前学習により被災地の現状に関する予備知識を得ていたにも関わらず、実際に被災地の惨状を目にした学生は、その悲惨な光景に言葉を失っていた。そして、このようなときソーシャルワーカーに一体何ができるのか、学生たちにはわからなくなっていたように思う。

しかし、活動を終えた学生の変化は素晴らしいものであり、無力感からスタートした彼らは、自らの感性で被災された人々の想いを感じ、被災地に何が必要かを考え、これから自分たちがすべきことを考察し、そして今、それを実行に移そうとしている。

ソーシャルワーカーへのインタビューでは、最初こそ緊張していたものの、回を重ねるたびに「聴き方」「問い方」「話題運び」に変化が見られた。実践のなかで急激に成長し、それまで「自分の想いを言葉にできない」と口にしていた学生たちが、インタビュー後の車内ではそれぞれの想いを言葉にして他のメンバーに伝え合っていた。本プロジェクトの活動により、学生

たちは日々成長している。



泉 綾子

「平時も災害時もワーカーの姿がテレビ等で見えない」と不思議に感じた。しかし現地では、よりその人らしい生活へとワーカー自身も喜びや困難を感じながらも向き合っている姿を伺った。現場の方とともにソーシャルワーカーの存在、役割、おもいを伝え、広めていきたい。



柴田城宜

時が経つにつれて、人々の震災に対する意識は薄れていくが、被災者とその支援者が体験した震災の記憶が消えていくことはないと感じた。



八木勇磨

今回の活動は自分にとって価値観が変わる出来事だった。これから福祉を勉強するものとして、一人の人間としてどう震災と向き合っていくのかを考えたい。



原佐知子

私は被災地で活動したソーシャルワーカーの声を聴き、震災の中で何が起こったのかという事実と同時にどのような想いで支援を行ったのか伝えていくことが、学生の私に出来る被災地支援だと考えている。



師岡彩音

「これからも私たちのことを見放さないで見守っていてほしい」ソーシャルワーカーへのインタビューを通して今後も継続的な支援が必要だと改めて感じた。



西畑知美

これからの被災地には何が必要なのか。また、ソーシャルワーカーの役割について、さらに広く、深く学び、伝えていきたいと感じた。



畑中美里

支援者を支援することの大切さなどを実感して学ぶことが出来た。そして世の中にソーシャルワーカーの存在を知ってもらいたいと強く思った。学生の力は影響力がないかもしれないが、少しでも自分たちの力が役に立つならばこれからも携わっていきたい。



西岡なつみ

テレビや新聞からの情報だけでなく、実際に自分で足を運んで、見て、聴いて、感じることの大切さを痛感した。今後は、被災地で働くソーシャルワーカーの想いを一人でも多くの方に伝え、後方支援に繋げていきたい。

あとがき

本誌は原稿から編集、校正まで、全て学生が自分たちで行いました。このプロジェクトを実施するにあたっては、「学生の”感性”と”自主性”を大事にしながら進めていこう」と、関係する教員で確認してきましたが、一つの結果がこの報告書だと思います。

昨今、ややもすれば教員主導になりがちな大学教育ですが、今回は、彼らが生の被災地を見て、ソーシャルワーカーの想いに触れる中で、「何を掴み、何を生み出すか」を見てみたいと思っていました。彼らと共に激甚被災地に入り、「全てが破壊されつくされた圧倒的無力感の中で、『第3者としてソーシャルワーカーが』ではなく、『ソーシャルワーカーである私に』何ができるか考えてほしい」とだけ伝えました。それは、正に15年前に、ひとりのソーシャルワーカーである私自身が、瓦礫と燃え盛る町の中で感じたことでした。

文教学院大学と本学の学生は、まっすぐ正面を向き被災地を歩き、2011年3月11日のあの時、この場所で被災した“人々”の姿に想いを馳せました。

以降、彼らの動きには目を見張るものがありました。それまでは何をするにも教員に了解を求めていた彼らが、自ら考え行動する、アグレッシブな若者へと徐々に変貌してきました。彼らに最も大きな影響を与えたのは、多忙を極める中、学生の質問に対して真摯な態度で応えていただいたソーシャルワーカーの方々でしょう。ソーシャルワーカーのインタビューを終えた学生は、「ソーシャルワーカー、格好ええな」、「私も災害支援ができるソーシャルワーカーになる」と口を揃えました。

帰阪後の彼らの動きも目を見張るものがあります。プレゼン資料、ムービーの作成、逐語録作成から分析、様々なイベントの企画、実施などなど、高いモチベーションを維持しながら、文字通り毎日のように私の研究室でそれぞれが作業しています。時折、大きな声で談笑する彼らを、「ここは君らの部室じゃないぞ」と叱りながらも、誰かにやらされているのではなく、苦しみながらも楽しそうに仲間と共に作業をしている彼らの姿は私たちの喜びでもあります。

4月に実施した第1回目の報告会では、一人の学生が、「私たちのミッションは、今の被災地で働くソーシャルワーカーの声を伝えること」と、明確に宣言したことがありました。このプロジェクトは参加した学生や教職員にとって、予想以上に大きな意味がありました。ただ、それだけで終われば自己満足にすぎません。ソーシャルワークを学ぶ学生が、災害支援におけるソーシャルワーカーの意義を発見し、それを記録として残し、さらに広く伝えることこそがこの活動の目的です。そういう意味でいけば、このプロジェクトはスタートラインに立ったばかりと言えます。

現在、第1次派遣チームは逐語録の分析、「学生“語り部”プロジェクト」の推進に力を注いでいます。また、第2次派遣チームは、夏のフィールドワークを目指し、事前学習に取り組んでいるところです。

第2次派遣には、7大学が参加する予定となっています。全国から集まる大学生が、共鳴しながら、このプロジェクトがよりダイナミックに展開されることを期待しています。

本プロジェクトの実施にあたり、何よりもまず、インタビューに応じていただいた現地のソ

ーシャルワーカーの方々に感謝を申しあげます。学生たちは皆様方の言葉の一つひとつを噛みしめながら、自らのキャリアとしてソーシャルワーカーを選ぼうとしています。もし将来、再び大きな震災が日本のどこかを襲った時、今度は彼らがプロのソーシャルワーカーとして、支援活動に馳せ参じるであろうことを私は確信しています。

宮城県社会福祉士会の高橋事務局長との出会いがなければ、このプロジェクトは実現していなかったと思います。「被災地に行きながら被災者のためのボランティア活動を何一つしないプロジェクトで良いのか」と悩んでいる中、高橋事務局長が「私たちが持っている問題意識と同じである」と、全面協力を申し出ていただいたことは大きな励みとなりました。今でも、「一緒にやりましょう」と応援し続けていただき感謝に堪えません。

また、このプロジェクトの方向性に迷った時、私は日本社会事業大学の大橋謙策先生を訪ねました。大橋先生は初対面の私を暖かく迎えてくださり、有益なご助言をいくつもいただきました。このプロジェクトを起点として、「災害支援ソーシャルワークのトレーニングプログラム開発に関する研究」といった共同研究グループも立ち上がりました。大橋先生からいただいたアドバイスを生かし、研究活動も進めていきたいと考えております。

福祉系大学経営者協議会の皆様方には、このプロジェクトの実施主体として大きなご援助をいただいております。文京学院大学の島田燐子理事長（福祉系大学経営者協議会会長）・森村幸男キャンパスディレクターをはじめ事務局の皆様、協議会事務局長の日本社会事業大学宇野裕専務理事には、復興支援委員会の開催やプロジェクトの後方支援など多大なご助力をいただいております。また、復興支援委員会の構成校である各大学の皆様には、多忙な業務の合間をぬって委員会にご参加いただきました。特に、東北福祉大学の先生方には、被災地の大学として復興支援に全力を挙げられている中、現地視察のコーディネーターや座学の講師をしていただきました。

今回のフィールドワークには、文京学院大学の山村睦先生、松本瑞穂先生がご参加いただき、学生・教員が和やかな雰囲気の中で毎日をおすごすことができました。他の大学とご一緒させていただく機会は、学生にとっても、教員にとっても貴重な体験でした。

本学においては、江端源治理事長・学長を筆頭に、教職員が一つのチームとして、このプロジェクトに臨んでいます。学生と教職員が一つの目標に向かって、それぞれの立場で関わる取り組みは新鮮でもあります。

このように多くの方々のご尽力の集大成が本プロジェクトであると言えます。皆様方のご支援に応えるためにも、今後もより意義深い取り組みとしていきたいと考えております。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長（関西福祉科学大学）

遠藤 洋二

プロジェクトメンバー

学年	氏 名	備 考
教員	遠 藤 洋 二	復興支援委員長
教員	松 宮 満	
教員	成 清 敦 子	
教員	野 村 恭 代	
教員	津 田 耕 一	
職員	小 川 英 輔	事務局・復興支援委員会委員
4 年生	柴 田 城 宜	
4 年生	八 木 勇 磨	
4 年生	西 畑 知 美	
4 年生	畑 中 美 里	
4 年生	原 佐知子	
4 年生	師 岡 彩 音	
4 年生	西 岡 なつみ	
3 年生	泉 綾 子	